

三省堂
国語教育

a new way of learning Japanese

第3号

ことば の 学び

特集
「ことばとからだ」



言語文化教育研究主催
第1回

国語教育 セミナー

in 大阪

7月28日、大阪市で第1回の「国語教育セミナー in 大阪」(天王寺区アウィーナ大阪)が開催されました。詳しい内容は三省堂ホームページに掲載しています。
(http://tb.sanseido.co.jp/cyukoku/kokugo/infobox/seminar1_osaka-news.html)



文化講演

「めがね・本・羅針盤—物語をめぐる不思議」

清水真砂子先生

(児童文学研究者・翻訳家。著書に「子どもの本の現在」など、訳書に『ゲド戦記』5部作など)



分科会ワークショップ

週3時間時代の
「読むこと」の
学習指導

三浦和尚先生

(愛媛大学教授)



分科会ワークショップ

「指導と評価の
一体化」を
すすめるために
高木展郎先生
(横浜国立大学教授)



分科会ワークショップ

教科書学習材を
「読む」

西橋正泰先生 (元 NHK アナウンサー)



2 特集

「ことばとからだ」

- 2 「ことば」と「からだ」の共振
—自分の「ことば」
牧戸 章
- 4 身体を置き忘れた「ことば」
堀切 和雅
- 8 「肝」の文化の発信を
村上 呂里
学びの部屋から
- 12 【話すこと・聞くこと】
「それはさっき言ったでしょ！」—聞く力を育てる—
和田 裕
- 14 【書くこと】 ことばとことば、ことばとところを結んで
—要約文の指導—
武田 祐子
- 16 【読むこと】 教科書をつくろう
—自作学習材づくりをとおして読み込む
屋代 健治
- 18 【古典】 古典、再発見！ — 郷土に息づく古典との出会い—
田川 学
- 20 【ことば】 自己表現に着目した国語教室を
中村 浩
- 22 【書写】 ことばの温もりを伝える手書きの文字
小林 和子
- 24 「話すこと・聞くこと」指導の実践
—「現代の国語」アンケートから

編集部

- ことばにせまる
- 26 「ことばに思い出す」 — 「ことばの力」を取り戻すために
清水 毅四郎
- キーワードで読む国語教育
- 30 「発展的な学習」「子ども読書の日」
「ヒドウン・カリキュラム」
尾木 和英
- いま、小学校では
- 32 IT時代だからこそ
塚田 正宏
- 新しい視点で
- 36 活動をととして学ぶ新たな国語の授業の可能性
— イギリスの取り組みを手がかりに
中村 敦雄
- 国語教育の「名著」再読
- 37 西尾実「言葉とその文化」を読む
三浦 和尚
- 本の紹介
- 39 『童謡でてこい』（阪田寛夫）
糸井 通浩
- 40 教科書新時代 編集後記



三省堂
国語教育

ことば の 学び

第3号 CONTENTS



表紙イラスト 藤原千晶 表紙デザイン 若林ゆかり
本文デザイン 服部美鈴 DTP制作 田頭ひろみ

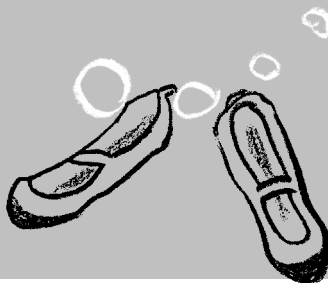
デカルトが、「精神」と「自然」を画然と分けたことで、近代以降、「精神＝理性＝ロゴス＝ことば」の爆発的な発展が始まったと言われて
います。わたしたちにとって、いちばん身近な「自然」は「からだ」です。生なりアリティよりも仮想現実や心地よい虚構が求められてい
る今日、本号では、「からだ」と「ことば」の断絶を乗り越える道を探る特集を組みました。

「からだ」の共振

——自分の「ことば」

滋賀大学

牧戸 章



国語教室(国語学室)における

「からだ」

これまで、子どもたちは座学を強制され、「背筋をのばして」というような「指示」のもとに、黒板および教員の方向を一斉に向くように拘束されてきた。「動作化」のような学習場面でも、それはあくまで読むことの学習における補助的な理解のためのものであり、「動作化」しないで読めることに越したことはなかった。

音読や朗読といった「声」に出してテキストを読むという行為は、本来は身体性を伴った行為であるはずである。しかし、右に述べたような空間では「記号の音声化」の側面だけに限定され、「漢字が読めているのか」「正確に理解しているか」をチェックする機能をもたされることになってしまった。

このように、物理的な「からだ」は国語教室(学室)には存在するわけであるが、本来のあるいは意識レベルでの「からだ」は排除されてきたのである。

「声」に出して読むとどうなるか

教室(学室)で書きことばのテキストを「声」に出して読むのは、音声化してだれかにその情報を伝えるためではない。もちろん自らの文章表現などを読む場合には、そういった情報を共有するという側面もあるが、「声」に出して読むときの対象テキストはいわゆる「読むこと」の学習のものであろう。そうすると、教室(学室)では、教員も学習者もそのテキストを、目にして読むことになる。

では、「声」に出して読むという学習の儀式(セレモニー)を行っているのであろうか。聞き手に授業の進行の流れに沿わせるための時間としてもちいられているのであろうか。

明確には言えないところであるが、たぶん、「声」を出して読む読み手は、他人の書いた書きことばのテキストを音声化することによって自らの「声」の「ことば」として「からだ」に響かせて、自らの「ことば」として再構成・再生しているのではないだろうか。そして、聞き手のほうは、読み手が「からだ」に響かせて自らの「ことば」とした世界に寄り添う感覚をもつのではないだろうか。

それは単なる音の響きという意味では

特集

ことばとからだ

01

「ことば」と

なく、読み手の「居方」や「たたずまい」といった「からだ」そのもののありように触れるという感覚であると思う。そのテキストの情報としての意味ではなく、読み手にとっての意味、それに出会う聞き手にとっての意味が生まれ、教室（学室）という時空はことばの身体性を回復し、「心地よい」ものとなるのであろう。そして、それは、「ことば」と「からだ」がその場の「声」を媒介に共振しているのであると言うこともできるだろう。

「ことば」の存在論的意味

読み手や聞き手にとっての「ことば」の意味というのは、コード的な（言語・社会的な約束事）意味ではない。もちろんそういった「ことば」の記号論的意味が不要であるということではない。

これまでの学校教育・国語教育では、「ことば」の記号論的意味の記憶量の多寡とその再現の速さをペーパーテストで計れる領域において「国語学力」とする側面があまりにも主流でありすぎたのである。したがって、国語学習はその「学力」のために奉仕するものとなってしま

っていた。「ことば」からその身体性「からだ」が捨象されてきたのは当然の結果であったのかもしれない。

自分にとっての意味、「ことば」の存在論的意味を大切に「ことば」の学びは、「からだ」がなくては生成・成立しない。そうした学びの積み重ねが、自分の「ことば」を生み出していき、そのような「ことば」を発する「からだ」とともに尊重される世界ができるのである。

ワークショップ型の国語授業

自分にとっての「ことば」の意味と出会うためには、「からだ」をくぐらせる、そして、「からだ」と「ことば」が共振することが大事になる。そのようなさまざまな体験が「ことば」の学びにおいて生まれてこなければならぬ。

そのためには、ワークショップ型の国語授業のあり方や工夫が積み重ねられていく必要がある。

「まきと あきこ」滋賀大学助教授。「ことばの学び」が生まれる場とその構成に求められるもの、そしてその公共性について考究する必要がある。

身体を

置き忘れた

「ことば」



劇団「月夜果実店」公演「トランスワールド」より

堀切 和雅
青山学院女子短期大学

意味におさえられる「叫び」

「ことば」をもたなかったころのことを、あなたは思い出せるだろうか？

僕は思い出す、蕩々とたゆたう光の中、母の唄を聞いていた乳児の自分、それを取り巻くあたたかい空気を。

いや、もちろん違う。これは後から、ことばによって捏造された記憶に過ぎない。

それでは、人がことばをもたなかったとして、その経験は「無」なのだろうか？

これも違う。ことばをもたない赤ん坊も、日々目くるめく豊かな体験・情動の動きを、重ねているはずなのだ。

このところ、いわゆる早期教育が度を越してきて、幼児に早くことばを話させよう、字を書かせようときまざま画策する親も多いと聞く。そういう傾向に対してはこう答えなければならぬ。

「ことばをもたない時代の豊かさを、できるだけ長く経験させてあげなさい。子どもから『字を識りたい』と言いつ出したときに、教えてあげればいいのです。」

そう言いなしてみるとたちまち、こういう疑問が湧いてくる。

「ことばを識ることによって、失うものが、人にはあるのではないか？」

以前、面白い本を読んだ。京大霊長類研の正高信男氏の、『子どもはことばをからだで覚える』（中公新書 二〇〇一）。乳幼児が、身体感覚をその震源としながらことばを獲得していく様子を実証的に述べたものだが、その「あとがき」でチラッとだけ、まだ証明されていない大きな問いを投げかけておられる。その大意は、「人がことばを獲得してしまったことによって、音楽が生まれたのではないか？」ということ。

学者である氏は、それ以上のことをあまり述べてはおられないのだが、僕はその問いを、素人なりにこう解釈した。

原始、人は心そのままに叫び、吠えている。ところが言語が生まれ、音の高低や母音子音の種類が意味に縛られるようになる。ことばは次第に身体からの自由な叫びや吹きから離れ、身体感覚の解放は制限されていく。それを補償するものとして、心身の律動を音に置き換えた歌が生まれた。以来、人が心の底から体をあず

けられるのは、ことばではなく、音楽になっっている……。

人はもはや、よほど危急のときか、意識に障害を来したときでもない、意味から離れたことばを叫ぶなくなっている。意味のないことばを叫ぶことはできないように、われわれは強力で規制されている。何に規制されているかというと、ことばという制度に。ことばには意味がなければならぬという、社会の約束事に。

意味による規制は、発声の制限にとどまらず、当然ながら身体全体に及んでいく。

僕が大学で担当しているのは身体表現の領域だが、「表現のための声と体の訓練」という位置づけで、一年生の「体育」の授業も受け持っている。

そこで僕はほんとうに驚いた。ついこの間まで高校生だった、一七、八歳の一年生たちの身体が、硬い。もちろんスポーツマンでもない中年男の僕よりも、若い学生たちの身体が現実には硬いわけではないのだから、彼女たちの身体は、なにか強い力に、規制されている。彼女たちは、説明の意味のない、自由な動きを

生み出すことができない。よしんば何かのきっかけで、「約束事」からは離れた感覚が彼女たちの身中に起こっても、彼女たちはすぐに、あるときは笑いで、あるときはお互いの顔を見合うことで、それをなかつたことにしようとする。

僕でさえ、演出家としてではあるが演劇の稽古場に長くいたせいで、特に意味のない、自分の体から自発する動きをしてみせるくらいはすぐにできるのに、彼女たちにとっては、それはとてもハードルが高いことになっている。高校時代まで、ずいぶんと机にしがみつかされてばかりきたのだから、と感じる。たぶんその結果、彼女たちの身体からは、「叫び」や「眩き」がきれいに消し去られてしまっている。

からだは縛られ、ことばは閉塞する

意味のある動き以外を生み出せない身体は、話すことはできても歌うことができない身体だ、と言ってもいい。それでも、もし、彼女たちの言語能力が十二分であったなら、生きてはいけるのかも知れない。皆が知るように、ひとは、思い

や感覚をことばによく表せたあの奇跡的な一瞬に、自由を感じ、快を感じるからだ。しかし近年の若者の例に漏れず、彼女たちの語彙力はしばしば充分ではないし、感覚とことばを繋ぐ訓練の場が、日常にあるわけでもない。

するとどういうことが起こるか。身体は言語的な意味の世界に縛られ、かといってことばの世界で自由に羽ばたくこともできない。これは、ずいぶんと苦しいことではないのか。

ことばは死に、そして身体は意味に縛られている。その救いのなさ。これは、若者に限らず、この社会に充満してきている突発的な暴力と、かなりな程度関係しているように思われる。現代の日本の、音楽やダンスへの強い指向は、縛られた身体に逃げ道をつくらうとする無意識の努力を反映しているようにも思うが、それさえもいまや消費社会のシステムに買収され、みな、自分の歌を歌い、自分の踊りを踊ることができない。

前記「体育」の授業で、僕がどのような手をさしているのかというと、大層なことではない。例えば、音楽を流し、「それではみんなで体育館の床に寝まし

特集「ことばとからだ」

よう」と言う。これは「自律訓練法」という一種の身体覚知の方法を根拠にしてはいるのだが、それを別に説明はしない。音楽を聴きながら、彼女たちはあるいは初夏の体育館の風の流れを感じ、あるいは遠くを走る車のくぐもった騒音を聞いているのだろう。そしてそのうちに、自然に眠ってしまう学生もいる。それでいい。

それだけのことだったりするのだが、すべての授業が終了したあととることにしているアンケートなどを読むと、彼女たちがその体験に、予想を超えて強い印象をうけたことがわかる。それは高校までの「体育」とはあまりに違う、ということがひとつ。それから、床に寝ころんだときに初めて感じた体育館の空間の広さや、自分の体の重みについて書く学生もいる。どの音を聴き、何を見るかさえ実は「意味」にとらわれて規制されている普段の生活。それとは違う身体を経験を、多かれ少なかれ彼女たちはするのだ。そういう身体覚知はいわば入り口で、その後はそのからだが、どう動きを生みだしていくかが課題となる。二年生以上を対象にした舞台づくりのゼミナールで

僕はそれを試みているのだが、はつきり言えるのは、身体が自由であるためには、ただやみくもに、無秩序にでも、からだが動き出せばいいのかというと、それは違うということだ。

枠組み、あるいは目標のようなものがないと、動き出したその動きを、どうにもできない。その枠組みは芸術や芸能でもいいし、スポーツでもいだろう。ただ、いずれにせよそれは、その瞬間瞬間に起こってくるスポンテイニアス（自発的）な動きを取り入れてさらに動きをつくりだしていけるような、緩い、柔軟な枠でないと、せつかく生まれかけた心身の自由を、封殺してしまうことになる。

舞台づくりの授業では多くの場合、できるだけ練り直した身体にまたことばをのせていくわけだが、身体が柔らかくなっている、発話の際にそれぞれの個性が立ってくるのがわかる。そして、これはものすごくうまくいけば、の話だが、身体感覚の律動の底から台詞が発せられたとき、それは歌っているのと同じになる。身体と、拘束要因にもなりうる「意味」と、自由な「叫び」の瞬間的な共存。これがときどき起こるから、舞台はなか

なかやめられない。

舞台のいいところは、抽象的な、意味の言語だけでは、事態が一步も進行しないことだ。そこにはナマの肉体が必ず介在するから、書きことばの意味はこわれ、揉まれ、空間や息づかいを含んだ広い文脈の中に置かれ、複雑な輝きを帯びはじめる。書かれたことばを正確に伝える、という点では制約要因になってしまいうはずのナマの肉体があるという事情が、ノイズを生みだし、倍音や不協和音を加え、かえって意味を豊かにする。制約要因が、逆に創造の源となるというのは、どんなアートでも経験されることだ。

同じような意味で、硬いからだ、仲間うちの身振りのみに閉じた身体、語彙を失った肉体を、多少とも演劇的な場に置いてみることは、意外な自己発見のきっかけになるのではないかと、僕は思っている。それはもちろん、本職の役者についての話ではない。普通の人間が、表現の必要に迫られてみることに。そこに、より自由なからだことばを獲得する契機があり得る。もちろん、（とくに指導者が）気をつけてやらないと、逆効果も生じかねないわけだが。

自分の体を救うために

僕は子どものころから、人間がこの宇宙についていくらかのことを識り、考えられているというそのことが、切なくて仕方がなかった。宇宙に涯はあるのだろうか。時間は、ほんとうに流れているものなのか。だとしたらそれは、いつ始まっていつ終わるのか。そして、時間が終わるとき、この宇宙も終わるのか……。

そんなことばかりをひねもす考える子どもは、長じて、宇宙についての問いを脚本にし、上演する人になった。そうしながらも、僕のからだはどんどん硬くなっていった。たぶん、あらゆるものごとを、言語的に思考していたから。僕の身体はどこかに置き忘れられたまま、思弁が病的に肥大し、答への与えられないその思弁は恐怖を生むから、緊張が生まれ、肩が凝り、僕の歩き方はぎこちなくふらふらになった。

偶然演劇と出会い、役者の身体（その制約と可能性の双方）と出会うことがなかったら、どうにかなってしまっていたんじゃないかと思う。ただ言語だけで思

考を続けていたら、いつか破綻が来ていたはずだ。

演劇公演という枠組みが与えられ、その中で現実的な努力をする習慣ができたからこそ、他者にも、もちろん自分にも身体があることを思い出し、全身を凝り固まらせながらもなんとか生きてこられた。

そして成功した公演のクライマックス、自分の編み出したことばが他者の身体によって語られ、しかもその身体が「歌っている」のを目撃したとき、意味に縛られ苦しめられた僕の中から心は一挙に癒され、そしてその感覚は観客と役者にも共有される。たぶん人間社会に原初的にあった、一体化の幸福。ことばと意味と身体それぞれが溶けあい、齟齬がない感じ。光に溢れ、それでいて地上に足がついた、未来が展望される感じ……。

その一瞬を得るために数か月かけて舞台は準備され、花火みたいに燃える。そしてその花火の燃えかすの匂いの中で、舞台は片づけられ、また堂々巡りの意味的思考に体を硬くする日々が続く。その繰り返しをしてきた。

意味にも、ことばにも苦しめられるこ

とのない原初の世界に人間が戻れるというなら、僕はそれに賛成してしまいかねない。幼児の王国。プレ・モダン。何度もそういう空想をし、そのこともまた舞台にしてきた。しかし現実の僕は知っている。意味からも、ことばからも、ひとは逃れることはできない。

ならば、意味の世界の中でときにことばを歌に近づけ、身体と共鳴させること。そのための実用的な知恵を集めること。それが僕に残された道だろう。そういうつもりで、僕は今日も授業の準備をする。だけれど、それはほんとうはだれのためのものでない、自分のためだ。自分の身体を救うためなのだ。

〔ほりきり かずまさ〕1960年生まれ。劇作家・青山学院女子短期大学教員。一方で劇団月夜果実店」を主宰。岩波書店『世界』などの編集者を十数年勤めたのち現職。劇作に『宇宙の零下』に抗して『アインシュタイン・ロマンス』など。著書に『結論を急がない人のための日本国憲法』（築地書館）『不適切なオトナ』（講談社）など。

「肝」^{チム}の文化の 発信を



村上 呂里

琉球大学

「声の文化」との出会い

早いもので沖縄に赴任して十五年余になる。

赴任したばかりのころにはすすきの穂にしか見えなかったサトウキビの花が、ほんのり紫がかり風につややかに揺れるさまに、沖縄ならではの「冬」の季節感を感じるようになったことだ。

沖縄本島最北山原の辺土名^{へんとな}を方言調査の一行につれられて訪れた。冬の物静かな集落で、共同売店（昔風のスーパー）に入ると、座り込んだほろ酔い機嫌のおばー（沖縄では年輩の女性を親しみをこめてこう呼ぶ）が、ふいに私たちのほうに向けて即興の言祝ぎ^{ことば}の歌を朗々と歌い出した。そばにいた琉球語研究者の先生に、どのような意味の歌かとお聞きすると、この地に新しい誕生をもたらすものを祝い、迎える歌であるらしい。その地出身の学生と私（そのころは私も若かった！）を新婚さんとまちがえたおばーが、うれしくなって歌い出したのだった。すでにある節にのせて、生活の折節^わに湧き起るその場の想いを即興で歌う琉歌の



伝統が、このような形でその場にふいに立ち現れたのである。とんでもない思い違いによるものではあったが、その場に根ざし、まぎれもなく私に向けて発せられた「声の文化」との出会い、それは私の心身を揺るがす出来事であった。

沖繩においては、自分のことばでありのままに生活を綴る生活綴方の伝統は「微弱」（浅野誠）と評されるほどではない。この出会いをきっかけに、私ははたと気づいた。そうか、琉球弧（琉球諸島のこと）の人びとは折節のありのままの想いを綴る（＝書く）のではなく、その場その場で「声」に発し、「今・ここ」の存在を「歌」に刻みつけ、綴ってきたのだと……。

「標準語」と「文字の文化」が厳しく一体化された近代学校の言語教育との拮抗のもとに、琉球弧の人びとがシマクウトバによる「声の文化」の伝統＝「シマウタ」文化を発展させてきたことに目をひらかされたのである。

本号の特集「ことばとからだ」に、沖繩で出会った「声の文化」という切り口から迫ってみたい。

「声の文化」と「文字の文化」

ここでウォルター・J・オングらによりながら、「声の文化」と「文字の文化」のおのおのの特質をふりかえっておきたい。「声の文化」の性質として、オングは次のように述べる（『声の文化と文字の文化』藤原書店一九九二による）。

身ぶり、声の抑揚、顔の表情、そして、実際に話される語がつねにそのなかで生じる全人間的、実存的な状況を含むのである。語の意味は、たえず現在から発している。

その場に根ざし、たえず「今・ここ」の時／地点から、からだぐるみで意味を生み出す「声の文化」は「全人間的、実存的な状況を含む」という。「全人間的、実存的な状況」の重要な要素には、目の前にいる他者＝相手との関係性があり、基本的に対話的な性質を孕む。

一方「文字の文化」は、いったん具体的・生活的・対面的な状況と切り離されるために、独話的となりやすい。そうした性質は、状況依存的な思考から抽象的で構成的な思索を可能とし、人類に多大な文化の進展をもたらした。一方で生活

と切り離され、他者とも孤絶した観念的自己世界を肥大化させてしまう危険性をも孕んでいる。

「声の文化」

具体的・生活的・対面的
身ぶり、声の抑揚、顔の表情とともにからだぐるみ、からだに根ざす

「今・ここ」の場に根ざす（即興的）
対話的

「文字の文化」

（いったん具体的・生活的・対面的な場、からだから切り離される）
抽象的構成的思索を可能とする

独話的・自己内対話的

具体的な生活・他者から切り離された観念的自己世界が肥大化する危険性

近代学校は、成立以来「文字の文化」優位の間であった。「文字の文化」優位が育んだ「学校知」に対し、見直しが求められて久しい。ことばの文化の分野でも、たえず「声の文化」と「文字の文化」を行き交いさせ、文字とことばに「声」から「だ」を生き生きと甦らせることが求められている。

それは決して「鍛錬」としてではなく、子どもたちのことばとからだを解きほぐ



特集「ことばとからだ」

し、癒し、共に生きていくことばとからだを育むために……。

『本が死ぬところ暴力が生まれる』

先日長崎で起こった12歳少年の幼児殺人事件について、今の時点で軽々に論ずることはできない。なぜ、この少年は他者のからだの痛みを自らのからだに共振して感じるができなかったのかという問いのみが重くのしかかる。「読書好き」であったという少年のプロフィールを見て、つぎの議論を思いだした。

『本が死ぬところ暴力が生まれる』というショッキングな題名の本がある（バリー・サンダース、新曜社一九八八）。サンダースは、次のように述べる。

（識字＝読み書き能力は）モノとして、口承と全く関係なしに獲得することができる。しかし本当の読み書きは、話すことと聞くことに立ち戻っていく大地との深い結びつきをもっている。

すなわち母親やその他の他者との緊密な関係性のもとに、赤ん坊が「しなやかさ、リズム、そしてことばも、吸収していく」「声を獲得し」ていく、それが「自

分自身について絶えず発見しつづける能力をもった人間へと変える活動」としての「本当の読み書き」の豊かな土壌＝識字の『恵みの母 (alma mater)』となるというのである。

そして読み書きをめぐる深刻な歪みを起こさないために、「初等・中等教育が全く新しい役割を果たす必要がある」とし、「識字の『恵みの母 (alma mater)』である口承世界への「はるばる戻る遠大な回帰」を主張する。

「文字の文化」＝読み書き能力の歪みを解きほぐし、「本当の読み書き」としていくためにも、「声の文化（口承世界）」の土壌に絶えず立ち戻り、「文字の文化」との行き交いを強く意識したことばの学びを創りだすことの必要性を、サンダースの議論は教えてくれるだろう。

『肝の文化』の発信を

さて、ここでもう一つことばとからだの結びつきを教えてください。沖縄のことばの文化を紹介したい。

ある島を旅したときのことである。旅の終わりにある島人が私に問うた。

「肝ふじー？」

「肝ふじー」とは「肝ふじゅん」の疑問形。共通語に直せば、「満足したか」という意になる。旅から帰って辞典をひもいてみた。「ふじゅん」は「ふず（解ず）」の琉球語。すなわち「ほぐれる」という意になる。「肝」は「心や情け」の意である。「心」が抽象化の志向をもつならば、「肝」はよりからだと一体となり情動ぐるみ含みこんだ概念であるといえよう。「肝がほぐれたか」——その語の成り立ちを理解した瞬間、私からだはふわりとあたたかに包まれ、心身ともにまさに「ほぐれる」感覚が湧いた。

「肝」のついたことばは、沖縄にたくさんある。「肝苦さ」（我が身も苦しいほどかわいそうでならない）「肝清らさ」（心の清らかであるさま）「肝愛さ」（いとしくてならない）「肝誇い」（喜び）「肝痛さ」（心が痛んでならない）いずれも人と人の豊かな結びつきのもと、からだから湧き起こり発せられることばである。

沖縄でも中学生の痛ましい事件が起こった。「開発」による地域共同体の急激な破壊とともに、「肝の文化」の急激な

衰退とかかわっているように思えてならない。

かつて沖縄の学校は、「標準語」教育の中で沖縄のことばの文化を「方言罰札」に象徴されるように厳しく抑圧した。沖縄の地域言語抑圧の教育が、沖縄の子どものたちの生活語に、今日に至るまで何らかの負の影響を与えたことは確かであろう。しかし今も「肝の文化」を身の内に育み生きてきた方は多く、いらっしやる。今日はむしろ学校が、地域の人びとと連繋し合い、ことばとからだと人との結びつきを豊かに孕んだ「肝の文化」の復権と継承の学びを創造し、さらには「肝の文化」を全国へ発信することが求められるのではないだろうか。

そして、沖縄に限らずたとえ都会であったとしても、「声（口ことば≡生活語）の文化」圏には、地域のここかしこに、生活世界に根を降ろし、ことばとからだの結びつきを豊かに孕み、人と人とのふれ合いのもとに育まれた生活語文化がぎゅと息づいているはずである。

「伝え合う力」の源泉は、きつと市井の人びとが育んできた生活語文化の中に豊かに見いだし得るにちがいない。

他者や世界との関係性がいっこうに見えてこない、情報化社会における大量の一方通行的無機質なことばの洪水に抗するためにも、一人ひとり固有の生活史と折節の想いのこもったことばの力を掘り起こす学びを地道に重ねる中で、肝から他者の痛みを感じ、肝から他者を思いやることばを育むことができたと願う。

「声」と「からだ」をとりもどす学びを

ことばに「声」と「からだ」をとりもどすいくつかの学びを提案して終わりたい。

- ①「声」と「からだ」のワークショップを
竹内敏晴氏による、ことばを、からだの次元から「劈く」試みは広く知られる。時に机を動かし、相手に「声」を届かせるワークショップ、互いに相手のことばに「聴き入る」対話のレッスン、群読、小演劇など、他者に向かって「声」を劈き、他者の「声」を聴き、他者と共に「声」を響き合わず基礎レッスンを折節に位置づけたい。
- ②「場の芸術」としての本（文字）の世界の学びを

個的で内省的な読書ももちろん大切だが、ブックトークや読み聞かせ（できれば学童や子ども図書館へ出かけて、実の場を設定したい）、詩のボクシングや群読などの活動を企画し実践したい。からだぐるみでことばのリズムを楽しんだり、登場人物になってその想いや感覚をからだぐるみ体験したり、本の世界を文字に閉じ込めず、「声」にひらき、他者とのかわりのもとにある「場の芸術」としての読書の学びをつくりたい。

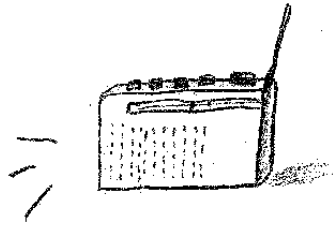
- ③聞き書きー生活語文化との出会いと意識化の学びを

インタビューの学びをとおして、相手の仕事や生活に根ざした生活語文化と出会い、その「声」と「間」にことばにできぬ想いを感じとり、語り口に生活史を読み取り、生活とことばの結びつきを意識化する学びをつくりだしたい。地域や仕事に根ざした生活語辞典、例えば「おばー語」辞典づくりもおもしろいだろう。

〔むらかみ りり〕琉球大学助教授。地域の言語文化と近代学校との関係性を研究中。今年からはベトナム少数民族地域に出かけ、言語教育研究を行う予定。ベトナム行きが楽しみ。

「それはさつき 言ったでしよ！」

——聞く力を育てる——



和田裕

横浜市立釜利谷中学校

実情

この仕事をしていれば、ほぼ毎日のように経験することであろう。朝の学活で担任が生徒に連絡をする。「今日は三時から委員会があります。」そして学活が終わると生徒がやってくる。「先生、今日、委員会ありますか？」私はがつくりと崩れ落ち、そしてこう言う。「それはさつき言ったでしよ！」教師になって十六年め。こんな状況は初任のころと比べると増加しているように思われる。

きっかけ

今振り返ると、九年前の教科会がスタートだった。先輩が「ねえ。静かに聞いているように見えて、実は生徒が話を聞いていないように思うんだけど……」他の国語科の三人がうなずく。先輩が続ける。「そこで、定期テストのときに、聞き取りテストをやってみようと思うんだけど。」三人は、またうなずいた。みんな同じ思いだった。

手探り

素晴らしいアイデアと思い、力を入れて「さあ、やるぞー」と思ったのも束の間、お手本がない。今では横浜市も診断テストで聞き取りテストを実施しているが、九年前では、聞いたこともない。自分の経験を振り返っても、あまり音声言語に時間を割いたことがない。英語科が昔から実施しているが、国語科として考えるとピンとこない。書店に行っても、あまり資料がない。自分たちで考えるしかなかった。

ネタ探し

とにかく短い文章を聞かせ、その内容に関するいくつかの質問を考えようということになった。その日から文章探しが始まった。教科書、学校の図書室、地域の図書館、新聞やラジオのニュース番組など、とにかく使えそうなものを集めた。その中で何回か参考にさせてもらったのが、日本語を学んでいる外国人の教科書であった。なるほどそうである。わたしたちも英語を習い、聞き取りテストを受けてきた。同

じ発想である。単に聞き取った中に答えがそのままあるものだけでなく、ことばの意味から推測して答える問題などバリエーションをつくりやすかった。他には、学習材や指導書の作者のことばなども使った。作者の考えが別のことばで伝わるので、学習が深まるような気がした。

レコーディング

作問が終わると、レコーディングである。当日の生放送では何かあった場合に対処できないので録音するしかない。

生徒の顔を思い浮かべながら放送室に入り、「少しでも楽しく」と、「踊る大捜査線」のテーマ曲を初めと終わりに入れて原稿を読んだ。設問は放送では言わずに、問題用紙に書いた。設問も聞き取らせなかったのだが、そうするとかなり時間がかかり、聞き取り以外の問題を解く時間が不足してしまいそうだったのでこうしたのである。ていねい過ぎると思っただが、二回読むことにした。一回目はゆっくり、二回目はやや早目に読んだ。

テスト当日

問題は、学年ごとに違うため、時間差

をつけて放送室から流す。各階ごとに放送するやり方を前日に教えてもらい、いよいよ本番である。

朝の打ち合わせで、担任に教室のポリウムを最大にしておくことをお願いした。放送時には、ポリウムチェックをするため、各階に国語科が待機し、放送室の窓に向かって「○』『小さい』『大きい』などのサインを送ってもらう。細かいことに気を配り、ミスのないようにした。

保健室受験の生徒がいるかどうかの確認も重要である。保健室受験が二学年以上の場合、ラジカセ持参でそれぞれ行う。(あまりなかったが)

結果と生徒の反応

一回目は、かなり易しくしたので、ほとんどの生徒が満点だった。(五問×二点で、計十点)二回目からは少し難易度を上げ、平均七〜八点くらいのレベルでつくり続けた。

生徒には好評だった。事前に勉強する必要がなく、気を付けて聞いていればある程度の点が取れるからであった。(こちらの趣旨とずれる点もあるが……)

また、毎回テーマ音楽を変ええるため、「今度は何の曲か」と楽しみにしている生徒もいた。(余談だが、塾は対策が立てられないこの聞き取りテストには苦勞していたとか、いないとか)

課題

九年間続けた聞き取りテストで、当初のねらいが達成されたかどうか。この取り組みの結果、全生徒が注意深く聞き取るようになったかという点、残念ながらそうは言えない。ただ、集中して話を聞く力、大切だと思うことをメモしながら聞く能力は鍛えられたと思っっている。

興味をもった方は試してみると何かが見えてくるであろう。

〔わだ ひろし〕 神奈川県横浜市立釜利谷中学校教諭。教育基本法・「愛国心」・犯罪の低年齢化・物が豊かで心が貧しいなどを気にしながら、愛すべき生徒たちと奮闘する毎日を送っている。

ことばと ことば、 ことばと こころを結んで

要約文の指導

武田 祐子

福岡市立箱崎清松中学校



1. はじめに

国語科教室の中で「自分の考えや思いを文章に書こう」というと、「書けない。何を書いていいのかわからない。」という生徒の姿が多いことを聞く。しかし、学校生活や国語科学習で「書かざるをえない」ような必然性のある学習材に直面したとき、子どもは「書くこと」に全エネルギーを傾ける。

それを実感したのは、卒業式のととき、各教室に掲示された子どもから保護者にあてたメッセージを目の当たりにしてのことだった。一語一語でいねいな文字で、「十五歳のリングゴたちです。こんなに大きく実りました。一つずつもぎとって読んでください。」と書かれた生徒のメッセージを、真剣な眼差しで見る保護者の瞳から涙があふれていた。

一枚のメッセージに込められた生徒のこころ、何よりもことばとこころの深い結びつきを、国語科の教師として感じずにはいられなかった。そして、ことばとこころが深く結びつく「学びの場」こそ国語科学習であり、「書くこと」は互いにこころを伝え合うことだと実感した。

2. 本の前書きを書く

—相手に的確に伝わるような要約をしよう—

一年生で単元による実践を行った。テーマは「本の前書きを書く—相手に的確に伝わるような要約をしよう—」である。学習指導要領では、論理的思考力の育成にかかわって、「要約力」を育てる指導が求められている。また、社会生活でも目的や必要に応じて、要約する力が求められる。しかし、今までの国語科では、分析力や総合力が問われ論理的思考力の発揮が求められる要約に、なかなか新しい指導法を見いだせずにいた。

そんなおり、大野晋氏の『日本語練習帳』に出会った。この本には、文章の骨格をつかむためにはまず、「地図を縮尺するように、文章全体を縮約してまとめる」こと、そして、次に「文章そのものを読み手が作りかえる要約を行うこと」と記されている。私は「要約」の学習目的や必然性を生徒が強く意識し、「縮約」を手がかりにして、要約へと向かう過程や手だてを習得すれば要約力が身に付くのではないかと考え、以下のような項目にポイントをおいて実践を行った。

■「要約力」をつける過程とポイント

- ①「要約したい」と思える魅力ある学習材（題材等）を選定すること。
- ②要約する目的や必要性などを、明確にかつ、具体的に意識させること。
- ③ことばにこだわり辞書を引くなど、「縮約する」ポイントをおさえること。
- ④論旨や要点を明確にするなど、「要約する」ポイントをおさえること。
- ⑤他の資料と読み比べし、文章を再構成すること。
- ⑥できあがったものを、学校生活等で積極的に活用すること。

3. 実践と生徒の姿から

■魅力ある学習材と、要約する目的や必要性について

今回は、「空中ブランコ乗りのキキ」を学習材として用いた。文章の長さが適切であり、子どもの目の高さで書かれていて、引き込まれるように文章に目をやる生徒の姿があったからである。

初読後、本の前書きを書き、新一年生に紹介するという学習の流れを説明し、書くことの目的と必要性を意識させた。また要約文を書いたあと、教師側のパス

コンソフトで作った要約文と生徒の要約文を比べ読みさせ、推敲に役立てた。

■学習を終えての生徒の感想

○「人VSパソコン」の要約比べを行った。ほくたちが書いた要約文と、パソコンの要約文を読み比べたのだ。ほくは「パソコンにかなうはずがない」と考えた。頭を悩ませて文字と格闘した一時間を、パソコンは何十秒で要約する。しかし、結果は意外なものだった。パソコンの要約は、文章の中のことばはしか使えないため、語句と語句のつながりが「つぎはぎ」だらけだ。ほくたちの要約文はひと味違う。辞書で語句を調べて、ほかのことばに置き換えたり、読みやすいように構成を換えたりしているので読みやすいし、内容も正確だ。今日の学習で、書くことのコツがわかった気がする。

4. 学校生活に生かす

完成した要約文は、司書教諭のご協力により、読書コーナーに推薦図書の前書きとして掲示していただいた。またこの学習を基礎・基本として、発展学習として図書室で各自が興味・関心のある本を探しガイドマップ集をつくった。

今後は図書室に常設し、新一年生が自由に閲覧できるよう計画している。

■学習を終えての生徒の感想

○自分が苦労して作った要約文を、「この前書きなら、買いたくなるね」と認めてくれた友達のことばに励まされ、わたしは発展学習「モモ」の本の帯と前書きをつくり終わりました。

今まで読書とは読むことだけだと思っていました。しかし、今度の学習で正確にまとめて書くこと、正確に伝えることに難しさややりがいを感じました。

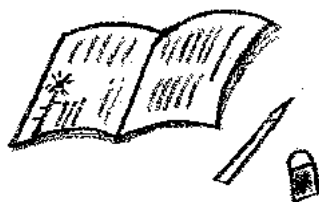
5. 終わりに

ことばとところが結びついたとき、ことばへのこだわりが生まれ、一語の重さを感じるのではないだろうか。卒業生と保護者で交わされたメッセージのように、私もことばとところが深く結びつき伝え合うような国語教室を目指したいと考えている。

〔たけだ ゆうこ〕 福岡市立箱崎清松中学校教諭。福岡市中学校国語研究会研究部長。福岡市教育委員会「基礎教育計画」「中学校評価事例集」の作成に携わり、実践と授業検証を行っている。

教科書をつくらう

— 自作学習材づくりを
とおして読み込む



屋代 健治

千葉市立打瀬中学校

一 教科書をつくらう

自ら進んで、意欲的に、興味・関心をもって「読む」活動に取り組ませるために、どうしたらよいか。

生徒一人ひとりが、自分にとって学びがいのあるもの、そしてそれを仲間といっしょに学びたいと思うもの、そうした作品を生徒たちが探し出して、学習材とすることはできないだろうか。自分たちで探してきた、身近で、親しみやすく、自分なりの「こだわり」があるものなら、その学習材は自分のものとなり、文字や語句も含めて、そこにもともと含まれていたさまざまな要素は余すところなく学ぶことができるのではないか。

「教科書をつくらう」という学びは、こうした考えから始まった。

「教科書づくり」は、まず学習材自体を各自で選定することから始まり、最終的にはできあがった自作「教科書」で、各自が授業スタイルの発表会を行う。

このような一連の学習過程の中で、生徒一人ひとりに読む力・伝え合う力・自己教育力・メタ認知能力等の力を身に付けさせたいと考えた。

二 教科書づくりについて

① 学習材の選定にあたって

以下の点に留意するように指示した。

ア 学習材が、自分にとって学びがいがあり、親しみやすいものであるか。

イ 学習材が、学級の仲間と学び合える要素をもっているか。(つまり、他者の視点から学習材をとらえ直すことと、「ことばの学び」の視点から学習材を吟味する。自作教科書で「授業」するために必要な条件)

② 教科書づくりの実際

展開計画(全12時間扱い)

● 第1～2時—教科書になる学習材(詩・小説・論説等)の選定。選定終了次第、次時の学習に進む。

《生徒の選材事例》

・ 蜘蛛の糸・よだかの星・ツエねずみ・アンネの日記・ガラスのうさぎ ほか
《選材理由》想像しやすかったから・感動したから・みんなにも考えてもらいたかったから など

● 第3～8時—学習材の文字をパソコンを使って入力。挿絵・著者紹介・新出漢字・「学習の手引き」の作成。

《作品をつくり終えたあとの感想》

◇初めはパソコンを使うのが嫌で嫌しかったがなかったけれど、やってみるとおもしろく、すごく楽しになりました。

◇まず本を探すのが楽しかった。自分で文章を打っていると話がよくなるし、出てくる人の心情がとてもよくわかるよな気がした。

◇本によっては難しい漢字も出てくるし、めったに使わない読み方も出てきて勉強になった

◇「学習の手引き」は、どうしたらいい授業になるか考えると、いろいろな考えが出てきてまとめるのが大変だった。何回も何回も読み直したので、ほとんど話を覚えてしまったくらいです。

◇自分で想像していた以上のものができた。「学習の手引き」も教科書のものでただ利用すればいいと思っていたが、先生と議論していき、教科書と違う手引きができたのでとてもうれしかった。

《学習の手引き》の例》

◇二つの詩を読んで、思い浮かぶ情景を班で話し合い、絵に描いてみよう。

◇次のお題を参考に歌を詠んでみよう。

「紅葉」「風」「月」「苺」「春夏秋冬」

*生徒は「教科書づくり」に意欲的に取り組み、学習材を何回も読み返し、文章を正確に理解しようとし、ことばをよく見つめことばの意味をとらえながら作業をしていることが見受けられた。

●第9～12時―3、4班に分かれて、発表会（授業）を行う。（発表者は、あらかじめ班で話し合い、略案形式の発表手順表を作成し、発表授業にのぞんだ。）

【発表会（授業）手順例】

（はじめ）・黒板にはってある絵を見て、感想や意見をもつ。

（なか）・黒板にはらわれている絵が、どの詩のものか発表する。

・班ごとに、絵に対する意見や感想を発表する。

・発表者自身が製作した絵を見て、感想や意見を述べる。

（おわり）・発表会感想プリント記入。
《発表者の感想及び発表会後の感想》

◇時間がびったりでよかった。みんな話し合うときは話し合い、聞くときには聞いてくれてよかった。

◇細かく言われると「あ、ほんとだ」と思えるところもあり、おもしろかった。

◇みんなの意見を聞くと、へえーこんな

とらえ方もあるんだと思った。

*授業スタイルの発表会についての生徒の感想や活動から、各自がもっていたイメージを意欲的に交換し合い、自分以外の人のものの見方・考え方・感じ方を知り、自分の糧とすることができたと考える。また、自分で作り上げた作品を公開し、他者の反応を知り、自己の思いを修正・深化させることができたと考ええる。そしてさらに、他者の授業を受けることにより、自分の知らなかった文種に興味をもつことができ、全体の活動からメタ認知能力も高めることができたと考ええる。

三 終わりに

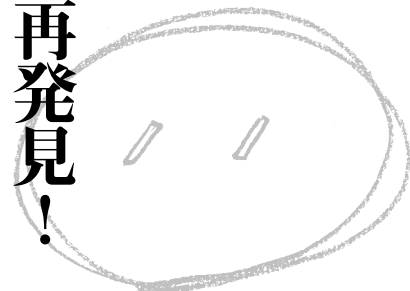
今回の「教科書づくり」をとおして、生徒一人ひとりが学習材を、読み、書き、なぞることにより、ことばをかみしめ読み込むことができた。また、発表授業をとおして、各自の感動が、広がり、伝わり、高まっていったということができると

〔やしろ けんじ〕千葉市立打瀬中学校教諭。
共著に『総合的な学習を支える学校図書館』
全国S・L・A、『総合的な学習の評価』明治図書など。現在は、心身の発達と学習の過程を
研究中。

古典、再発見！

— 郷土に息づく

— 古典との出会い —



田川学

滋賀県大津市立日吉中学校

一、まずは興味関心を

「先生、僕らが住んでる所に、こんなおもしろい話が残ってるんやなあ。知らんかったわ。」三年生の古典の授業の導入で『雨月物語』の「夢応の鯉魚」を紹介したあと、数名の生徒が発したことばである。日ごろ、生徒たちにとってはなじみのない古典だが、このような「面白い話」には心を揺さぶられるし、その話の舞台が郷土であればさらに興味は深まる。そこで、郷土に伝わる古典を再発見する中で、古典をもっと読みたい、古典のおもしろさを語り合いたいという思いを高める課題解決学習を設定した。

二、「古典を味わう」学習の流れ

1 単元指導計画（全一九時間）

○学習目標

- ① 昔と今とで変わったもの、変わらないものを見つけよう
- ② 教科書教材を学習し、古文の基礎、古人の人生観、芸術観を知る。
- ③ 地域に残る古典を調べる。
- ④ 昔と現代とで変わったこと変わらなかったことを追求するための学習課題を

練り上げる。

④ 自分の学習課題に応じた学習計画、学習形態を考え、学習の見通しをもつ。

⑤ 自分の学習課題を追求する。

⑥ 中間発表を行い、友人と学習の成果を交流する。

⑦ 課題に対する考えをまとめる。

⑧ 学習を振り返り評価を行う。

三、指導の工夫

1 「ならい」と「ゴール」

生徒たちは、授業の最初に「今日の学習のねらいとゴール」を書く。その時間に追求する課題を明らかにさせ、学習後の自分の姿を想定させるのである。学習の見通しをもつことが「一歩成長した自分」をメタ認知することにつながり、課題からずれることを防ぐ。

2 「違い」が「自分らしさ」

生徒たちが学習した成果をやりとりする場面を、授業の中で意図的に設けた。ここでは、生徒どうし、生徒と教師との間で「伝え合う」ことが繰り返される。友達の優れた点を取り入れることで学習が深まり、人との違いを知ること、より自分らしい学習になっていく。例えば、

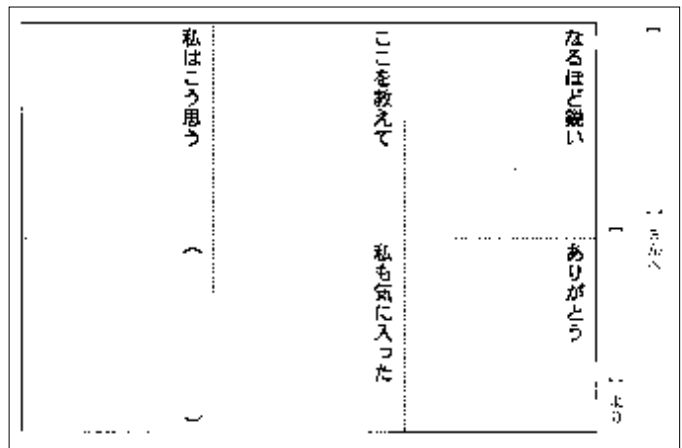
「大津の古典を調べる」という課題は「なぜ大津に芭蕉の句が多く残っているのか」に変わり「芭蕉の句碑のある場所を調べ、そのときの心情をまとめる」というふうになり、交流を重ねることで質的に高まっていく。

3 肯定的な相互評価

交流の一つとして中間発表の場を作った。生徒たちは掲示や口頭で学習の途中経過を報告し、互いに相互評価を行う。下の表のような五つの評価項目から当てはまるものを選んで記入し、発表者に渡す。どの項目も肯定的な内容である。評価する生徒は発表の優れた点に着目することになり、発表者は自分の良さを教えられて、学習の成果に自信を深めることができた。

四、学習から見えてきたもの

「近江の昔話」に学習課題を求めた子ども



もは、ことばづかいに注目した。

物語の出だしやおしまいの部分の共通した言い回し、話者の気持ちを表す独特の文末表現を作品ごとに整理した。その結果、昔話に残る語り口にはあたたかみやリズム感があり、自分たちが使っている現在の話ことばと共通点が多いことを明らかにした。また、額田王について調

べた生徒は、近江の地で詠まれた歌「あかねさす紫野行き標野ゆき野守は見ずや君が袖振る」を中心に取り上げ、額田王の恋愛観を探った。当時放映されていた恋愛ドラマと比較しながら、相手に気持ちを伝える技法は昔のほうが豊かであったことや、男女が惹かれ合う気持ちは今も昔も変わらないことを実感していた。いずれも、昔と現在とで変わったもの、変わらないものを追求した好例である。時代や生活、ことばは変わっても、変わらずに日本人に生き続ける精神に触れることができたのである。

五、郷土そして自分の再発見へ

「僕の先祖も今の僕と同じようなことを考えていたのかなと思うとちよつとうれしかった。日本人は昔と変わっていきそうで変わってないことがわかった。」

郷土の古典を窓口にも、先人の知恵や思いを探ることは、自分たちのルーツに触れ、自分自身を改めて見つめる契機となったようである。

〔たがわ まなぶ〕滋賀県大津市立日吉中学校教諭。今年度は「聞くこと」を基盤とした「訊く」力を育成する授業と評価を研究中。

語活動であり、外からは見えない。何かをきっかけにして、自分の中に違和感が生じたとき、人は主にことば化することによって、その違和感を対象化し、心の安定を得ようとする。その違和感を了解するために「自己表現」するのである。

中学生の場合、自己表現するためのことばを十分にもっていないために、いらいらしている状態をことば化することができずに口を閉ざしてしまったり、簡単に「ムカつく」ということばにしたりする。しかし、自己表現が自分の心理状態と合致していないので、心の安定を得ることができないでいる。

ところで、自己表現されたことばは自分だけのものであり、それが外部に発せられるときは、さまざまな「場」意識を受けて、違う表現となって出てくる。例えば、十分な自己表現をもつていても、相手を拒否したいときは「ムカつく」と言ってみせることもできるのである。だから、本当の意味で自己表現を吟味できるのは使い手自身しかないのである。「伝え合う」ための方法を学ぶことで、自己表現を相手に伝えることはできるようになるだろう。一方、「伝え合う」も

のとしての十分な自己表現をもたせるためには、どのような方法が講じられていくべきなのだろうか。現在のところ、次のような手立てを考えている。

①生徒の自己表現を誘発するような学習

生徒の新たな感性や認識を引き出す可能性があり、大きな違和感を感じるような教材を開発すること。いわば、生徒が自分の感性や認識をことばにして理解しなくなるような状況を生み出すこと。

②生徒の自己表現と発したことばのズレを感じさせる学習

生徒が自分の発していることばと自己表現とのズレを考えることで、自己表現することばが十分であるかを考えさせる授業の展開をすること。自分の発していることばを自分の思いと比べることで、自己表現を見直す契機となる。

いずれにしても、学習の場面では自己表現が言語表現としては顕在化しないために、生徒のことばをいかに分析していくかが問題となる。思春期の最中にいる中学生は、教室の中では、仲間や教師に対する過剰な「場」意識をもっている。

そのため、教室の中で発言されたり筆記されたりすることばの中から、自己表

現を見抜く教師の目が必要になる。

国語教室ができることは何か

自己表現を誘発し、他者へ伝え合う段階までが言語活動である。そういう意味でやるべきことは多い。しかし、こういった言語活動を生徒は日常生活で行っているのである。衝動的な振る舞いをして、人や物や自分を傷つけてしまうような生徒たちに、国語教室ができることは何か。

それは、自己表現することによって、自分の感性や認識がことばとして対象化され、心の安定の糸口となることと、自己表現が相手に対して伝えやすいことばとなつて、他者との関係づくりを担うということではないだろうか。

冒頭で述べた生徒は、私と対したときに、自己表現のことばをさがして、それを繰り返して反芻する中で、落ち着きを取り戻そうとしていたのだと、今は思う。

〔なかむら ひろし〕 山口大学教育学部附属
山口中学校教諭。山口国語教育学会に所属し、
「音声と言語の会」に参加して音読の可能性
を探った。最近では国語教室ならではの言語体
験を模索中である。



こころの 温もりを伝える 手書きの文字



小林 和子

兵庫県篠山市立篠山中学校

「手書き」のよさを

生徒を取り巻く文字環境は、活字が多くを占めるようになっていく。

プリントアウトされた活字は、均質で読みやすく、最近ではさまざまな書体もある。しかし、手紙をもらうなら手書きのものが欲しいと言う生徒も多い。自分一人に向けて、一字一字書いてくれた手紙には、相手のこころの温もりが感じられるのだろうか。

日本文化の中の書写

教育課程の改訂がなされるたびに、書写の授業時間が削減されてきた。

文字を書くことを力強い芸術にまで高めていった中国、そして漢字からかなをつくりだし、連綿を使った流れるような筆の線の美しさを生み出した日本。

漢字とかなの特長を生かして文字を書く文化は、日本の文化をある意味で代表するものである。

もちろん中学の書写は、高校書道と異なり「書の美」の追究を目指したものである。

しかし、国際化が進む中で、今こそ生

徒たちに日本の文字の文化を、自分の手で文字を書くことをおしえて、しっかりと学んでもらい、外国の人たちに「これが日本の文化だ。」と胸を張って紹介できるようにしてほしいと考えている。

書写の授業を確保する

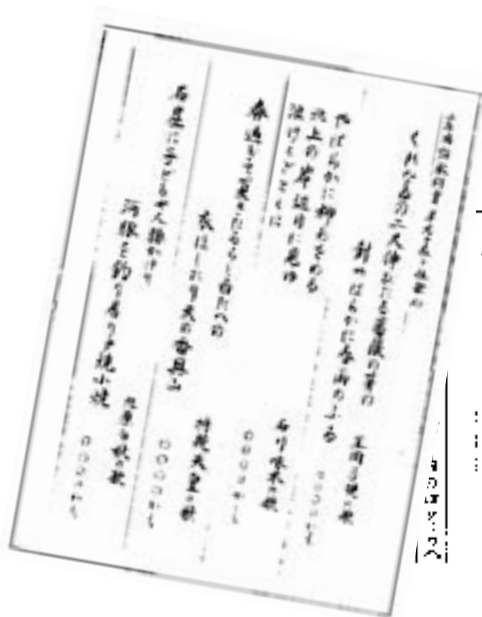
中学校一年生では、週一時間を「書写」と時間割の中に明示し、書写と文法の時間としている。二学期までは書写、三学期の書き初めが終わってからは文法の授業をしている。

二・三年生は、行事（県のコンクール・市のコンクール夏・冬二回）のときに、全校で練習二時間、清書一時間を取っている。その他、授業の中では、時間の節約のために、筆ペンを使っている。近ごろは筆先がよくきくものが出ていたので生徒たちも喜んで書く。

筆ペンは、生徒たちの個人持ちとして氏名を書いて学校で保管し、国語の授業で、詩・俳句・短歌・古典の冒頭の文などを視写するときに活用している。

学習材を手づくり

教科書の活字を見て書くのは難しいの



其の相違みは、種々あり、書すべし、
 此の如き、道、
 月日は百代も遠客、一、一、
 年、し、ま、終、ん、が、ち、

で、つたない自作のものだが、学習材をつくって、いつでも使えるようにファイルにしている。ファイルの内容は、国語の教科書の中の詩・俳句・短歌・古典の冒頭の文などで、夏休み・書き初めなどの文字例も掲載している。

できるだけ筆文字に親しみ、日本文化

のよさを理解し、継承して欲しいと願っている。

また、指導に自信がないときは、書写の教科書をA3の大きさに拡大コピーして文字の部分を切り取り、B4の紙に張り直す。その文字をもとに、箱書きや、骨書き用のプリントを作ると文字が大きくなり、のびのびと書くことができ、生徒の作品も大きく力強いものになる。

生徒のころへの呼びかけに

物質的に豊かになったけれども、みんなが忙しすぎて、ゆつくりと話し合いができないのか、ころが満たされていない生徒も多いように思う。教師もまた、忙しさを子どもたちとゆつくり話す時間の余裕がなくなってしまう。

そんなとき、ころの温もりを伝える手書きの文で、生徒のころに語りかけたいものである。今は、絵手紙で習った絵を添えて毎月書き換えている。

学校の階段の踊り場にある黒板にチョークで、その時々季節に合わせてメッセージを書く。チョークの色もたくさんあり、横に使うことで色々な表現ができておもしろい。



月ごとに、そのころ咲いている花をモチーフに生徒への呼びかけの文を書く。あまり堅すぎないように気をつけながら……。

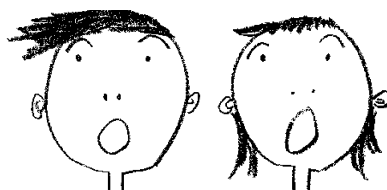
生徒たちの文字環境に、ころの温もりの伝わる手書きの文字を増やしていこうと考えている。

（こばやし かずこ）兵庫県篠山市立篠山中
 学校教諭。新潟大学書道科卒・丹有地区書写
 指導員、兵庫県教育研修所の書写の講師を経
 て、現在丹有地区書写幹事。

「話すこと・聞くこと」 指導の実践

— 『現代の国語』 アンケートから —

アンケート



「授業時数が足りない」、「これまでほとんど経験がない」など、「話すこと・聞くこと」学習の指導は、先生方の多くが苦心されています。

昨年度、先生方は新しい教科書の「話すこと・聞くこと」学習材をどう受け止め、どう実践されてきたのでしょうか。

三省堂では、平成十四年版『現代の国語』を使用されている全国の先生方にアンケートをお願いいたしました。

お寄せいただいた回答から一部をご紹介します。今後のご指導のお役に立てば幸いです。

- ・アンケート実施期間〓二〇〇二年十月
〓十二月
- ・有効回答数〓515

■学習材についてのご感想・ご意見

『現代の国語』の中から二つの学習材について、先生方のご意見をご紹介します。

- ①「討論ゲームをしよう」(1年)
- ・基本的な討論の形を学ばせるのには有用だった。
- ・理由を確かにして意見を述べる学習は

大切である。生徒も興味をもった。
・全員が話し合いに参加できる学習材で活発に学習できた。

と、討論の基礎習得のための学習材として評価も高く、実践された教室も多いようです。

一方で、実践する中で、「題材選びが難しい」、「自分の意見に固執してフロアの移動(自分の意見に応じて場所を移動する)がほとんどない」、「議論が白熱すると適切なことば遣いができなくなる」などの問題が起きてきます。

実施の前に、『学習指導書』付属のビデオ(「話すこと・聞くこと」の学びをひらくビデオ)を見せ、実際の討論ゲームのイメージをつかませることで、いくつかの問題は解決するかもしれません。
・VTRを見せてから行ったが、生徒にとってもわかりやすかった。

・ビデオがとても役立ちました。よい発表と直したほうがよい発表があったのが特にわかりやすかった。
と、ビデオを評価されるご意見が多く寄せられました。

今回のアンケートでは、ビデオが役に立ったとされるご回答が各学習材とも目

立ちました。とくに「討論ゲームをしよ
う」と3年の「パネルディスカッション
をしよう」のビデオの評価は高かったよ
うです。

◇ビデオ所収プログラムと関連学習材
1年

「討論ゲーム」

▼「討論ゲームをしよう」

「話し合い—企画会議」

▼「学校案内パンフレットをつくろう」

「話し合いの仕方」

2年

「ポスターセッション」

▼「ポスターセッションをしよう」

3年

「パネルディスカッション」

▼「パネルディスカッションをしよう」

②「対話劇を体験しよう」(2年)

劇の創作・発表という活動をとおして、
子どもたち自身の日常の話しことばを振
り返らせるこの学習材は、

・対話は重要であるのに、生徒は苦手で
あるのに、この学習材に期待している。
など、関心が高く、まだ実践されていな
い先生がたからも、「ぜひ取り組みたい」

と取り組みへの意欲を示されるご回答が
寄せられています。

実践された先生方は、「内容がやや難
しい。ビデオを見て理解できる表現もあ
る」、「平田オリザさんのビデオがついて
いるのがありがたい」と、やはりビデオ
を援用されている例が多いのではないかと
思います。

アンケートからは離れますが、『演劇
と教育』二〇〇三年六月号(晩成書房)は、
「対話劇 って何だ?」と題した特集を
組み、対話劇の実践例を二つ紹介してい
ます。また、実践への提言として正嘉昭
先生(東久留米市立南中学校)の文章が
掲載されています。

この中で正先生は、「苦戦例」の原因
を分析し、ご自身の工夫をいくつか紹介
されています。そして、「この対話劇の
授業の生命線は『目』にある」とし、創
作した劇の発表では、教科書から目を離
し、相手に向けさせることを強く勧めて
おられます。

■学習材以外での「話す・聞く」学習活動
アンケートでは、教科書の学習材以外
にどんな学習活動を実施されたか、お聞

きしています。

各学年ともに多かったのは、「弁論大
会」、「スピーチ(大会)」、「ディベート」、
「聞き取り(テスト)」でした。

聞き取りの素材は、先生方それぞれ工
夫をされているようです。指導書付属の
CDのほか、「外国人向け日本語教材」、
「NHKラジオのニュース」、「コラム歳
時記」(地方紙のコラムを集めた月刊誌。
二ホンミック発行)、「力のつく音言
語学習50のアイディア」(三省堂刊・巻
末の書籍案内参照)などがあがってい
ます。

アンケートでは、さまざまなお意見
をいただきました。一つひとつのご意見
を今後の教科書づくりに生かしていきま
す。ご協力いただきありがとうございます。
集計結果は、ホームページ等で公
開すべく準備中です。

また、三省堂『現代の国語』ホームペ
ージでは、実践のアイディアや学習材案
を募集しております。裏表紙のご案内を
ご参照いただき、どしどしお寄せくださ
い。

(編集部)

一 富山市立堀川小の 研究テーマ

筆者がここ数年來参観している富山市立堀川小学校（恒田勉校長）では「個と追究」という研究テーマを掲げている。二十年ほど前の（同校七冊目の）著書の中の、「ことばと事実と思考の関連を求めめる」という文脈において以下のような考えを述べ、今日に至るまで実践してきている（『生きかたが育つ授業・上巻・理論編』明治図書 一九八四）。

「授業は子ども**の**追究の具体化に働きをもつてくる場ではなくてはならない。追究を具体化するのは、ことばと事実と思考の関連を**求める**ことである。私たちの事実認識は、ことばに置き換えられ、ことばにより整理されていく。ことばは、認識成立への手さぐりの武器である。ことばによる認識と事実の対応を求め続けることが思考であり、追究である。私たちが、ことばに**思い出す**ことを重視するのは、以上の考えに基づく。ことばに**思い出す**ということから、授業における発端の追究を『設題』や『課題』に求めるこ

「ことばに思い出す」 — 「ことばの力」を取り戻すために



清水 毅四郎 滋賀大学

とが多い。」（前掲書P78～80 引用者による要約）

同校の授業を参観してきて私は、発言している子どもが泣き出す場面に何度か出くわした。参観者の自分がその場に居合わせるのがいたたまれなくなるときがあった。体を強ばらせて忍び泣くとか、泣いてごまかすとか、泣き叫ぶとか、というのではない。

同校の授業は「話し合い」と言うよりも「独白」（宇都宮大学 溜池善裕氏）、「聴き合い」（元同校校長 竹田正雄氏）に近いと言うが、同感である。あるいは「各自が問いたくて問い、聴かずにおれなくて聴く構えを感じる」（埼玉大学 岩川直樹氏）とも言われる。他者と語り合うなかで子どもが自分自身の立場を見つめ、発したことばを吟味検討し、他の人物・事とのつながりについて新たに気付いたり改めて想起したりして、目を潤ませ涙声になっていくのである（もちろん担任教師の持ち味や力量、学年の特性、学級の雰囲気の違いで異なってくる）。子どもが本音を自前のことばで語りかけるのを他の子どもがよく聴いている。とともに、発言している本人自身が心を

揺り動かされ泣き声になるのである。そういう場面にふれて「ことばの力」を感じたのである。

二 「弱くなっている

言葉の力」

このような事例を述べることから始めたのは、過日の新聞紙上（朝日・二〇〇三・七八）に、井上ひさし氏と秋田喜代美氏による読書の意味をめぐる対談が掲載され、そこに「弱くなっている言葉の力」という見出しがあったことを思い出したからである。

近年の読書離れに言及するなかで秋田氏は「視覚情報が進む社会の中で体感がともなわず、言葉は平面的な文字記号に過ぎないととらえられているのではなにか。だから言葉が人々の心に深く入っていないか。（かつては）言葉が出来事になっていった、生きたつながりを作っていたが、今はその力が弱まっている。パッケージみたいに送られてくる情報の中で、流されていく記号のひとつになっている。」と指摘する。

「生活経験の乏しさや読書・作文の量の少なさ」は、我が国においては既に四半世紀前から指摘されてきた。「下層の生まの経験がやせ細り、より上方の抽象的なことばの層も貧弱になっている。逆に、テレビを中心とする映像との結びつきに頼る抽象度の低いことばの層（中間的層）が占める量的割合が大きくなっている。」と（宇佐美寛『授業にとって「理論」とは何か』明治図書 一九七八 P146）。

三 生活の再建と

一人追究の徹底

それ以来、一方で子どもたちの生活の再建の必要性が叫ばれた（一九九八年版の『学習指導要領』で「総合的な学習の時間」が新設され、「体験的な学習、問題解決的な学習の必要性」が掲げられたのも、そのためである）。子どもらを手間ひまかけて周りの対象と深くかわり、のめりこむ体験を回復してやるのである。例えば人間の交流（フェイストゥフェイス）における気づかいやわずらわしさの体験をすることが必要である。テ

レビゲームなどにみるリセット可能な人工的な擬似体験ではなく、生きた本もの人や事にかかわっていくことが求められるのである。

堀川小では、教科外活動として「朝活動・くらしのたしかめ・自主活動」を正規のカリキュラムに位置づけ、それなりの時間を充て、ささやかに見える日々の諸活動の平凡な営みの継続性を大切にしている。いわば「ことば↕経験」の思考の往復運動（宇佐美前掲書）を重視しているということである。朝活動や自主活動では教師ともども子どもらの真剣に取り組む姿や助け合う姿が見られる。くらしのたしかめでは相互にきついこと、言いにくいことも発言している。身につまされ泣き出す子どももいる。

子どもらを取り巻く今日の擬似体験的・映像的な文化のもつ負の面に飲み込まれながらも、それに打ちまかされてしまわない学校生活や学級生活の充実がこの学校の子どもの追究を支える基盤になっていると言えよう。

他方で「ことばに思い出す」という授業発端の「設題」方式に同校の工夫が見られる。「丸い形」（一年算数）・「美しい

形」(六年同)、「とける」(五年理科)、「てこ」(六年同)などがその例である。

ことばの提示により思い出すこと(単語や短い語句)を自由に書き留めさせる。思い出した事項を一人追究によって比較し整理する。事実・事物・事象をイメージ豊かに想起し、それらを関連的に把握して仮説や予想を深めていく。さらに新しい視点や意味を見出しながら、見えている世界をそれなりに統合していく。このような思考をおして、子どもは自らの追究課題を明確にし構想していくのである。設題に見ることばを契機に、自らの生活経験を再構成し、諸事実の間に疑問や関連性を見いだしていくのである。

四 「ことばを思い出す」指導の難しさ

堀川小は毎年、一月末に公開の校内研究会を、五月末の水曜・木曜に二日間の研究発表会を開催している。今年の研究会では、授業の事例研究の一つに五学年「とける」が報告された。「とける」という設題を教師が提示することから授業は

始まる。子どもらはそれぞれ身の回りの経験を想起して、「鉄が熔ける」や「薬が水に溶ける」など自分の追究問題を設定し、そして実験・観察し、解決しようとして一人で学習を進めていく。岡田(仮名)さんは「ナメクジがとける」という現象にこだわり、顕微鏡を使ってナメクジをとかず実験をし、観察、比較、予想、考察を繰り返していく。同校は、集団学習としての授業を他者の視点に刺激され自己の追究を見直し、評価していく場と見ている。各自がそれぞれ「とける」イメージを出し合い、「とけると混ざるの違い」など各自の「とける」観を出し合うこととなる。子どもそれぞれが、自分の生活に根づいて実感のともなったリアルな追究をして欲しいと授業者は願っているわけである。そして同校は、子どもに現れた事実をふまえて次時の授業の計画を創っていく、と主張する。

右の研究発表会では、「ナメクジがとける」現象の解明に執念を燃やし続けた岡田さんの追究の視点が、他者の追究の視点と噛み合わずズレ違っているのに取り上げられないことや、五年理科の指導内容(モノの水による溶け方、水溶液の

意味と重さの変化、温度変化と溶ける量の関連、など)のすべてにつながらない点が課題として出された。授業の中で現れる子どもの「事実」も、発端の授業においてどのようなことばで設題を提示し追究を開始させるか、にかかっている。土俵の大きさを変えれば力士の動きも変わらざるを得ないように、当然、教師のことばの提示の仕方に応じ諸事実(追究の姿)の違いも現れてくるということである。単に「とける」か、それとも「水にとける」か、さらには、教科書教材の見出しに見る「塩やほう酸のとけ方」にまで限定するか。教師の提示することばによって子どもの追究様相は大きく違いが出てくる。「ことばに思い出す」はたらしへの教師の見通しに、子どもらの追究をどう生かすかが懸かっている。その際いろいろなことを教師は考慮するだろう。子どもらの、当該学年の発達の特性としての思考力・認識力の程度、既習経験による追究力の育ちぐあい、生活に見る知識の量と質、追究への意欲・関心・必要感(切実性)、後の学年を見通した教科内容指導の順序の妥当性、当該学級に見る学習集団としての凝集力、科学・



芸術など文化の本質に迫りかつ子ども
手に負える学習と成りうるか、等々につ
いて判断を求められることになる。
「ことばを思い出す」ではなくて「こと
ばに、思い出す」ところに難しさがあると
言えよう。

五 個全体の 迫力衰退の問題として

ことばの指導は、国語科だけにかかわ
る問題ではないし、国語科に閉じこめ
べきでもない。他教科の内容指導もこと
ばでなされていることに留意したい。先
の「とける」現象にしても、「まざる」
との違いが話し合われたように、理科に
おいてもことばを手段として思考し追究
している。ことばを手段としなければ、
知識や理解の獲得はあり得ない。他教科
においてもことばを吟味検討することに
よって、自然や社会にみる現象・事象・
事実の関連性を把握することができるわ
けである。したがって深く意味づけられ
たことばの学習をするにあたり、国語科
の枠を超えていくことがあるのも自然で

ある。

半世紀前に出版され長年読まれてきた
『山びこ学校』（無着成恭編一九五二）は、
戦後初期の生活綴方指導の輝かしい成果
と評価されている。その場合編者は「あ
とがき」で「私は社会科で求めているよ
うなほんものの生活態度を発見させる一
つの手がかりを綴方に求めた」また「（そ
れまでの）目的のない綴方指導から、現
実の生活について討議し、考え、行動ま
でも押し進めるための綴方指導へと移っ
ていった」と述べる。同書に収められて
いる綴方は、生活におけることばを文に
書き留め、社会や生活を考え直させるた
めの出発点として書かれたものである
（学習の結果として書かれたものでな
い）。このことはあまり知られていない。
生き生きとした生活感情や生活認識にあ
ふれたことばの表現による綴方はそのよ
うにできあがったのである。

今日、「学力」低下論で基礎・基本の
徹底が叫ばれる。読み・書き・計算の力
のことが話題となり、国語科や算数科の
問題として語られがちである。読み書き
計算の技能獲得の訓練には「学年的適時
性」というものがあることは分かるが、

もう少し広い舞台（視点）で問題にする
必要はないだろうか。子どもらの生活体
験の貧困さや、映像文化の氾濫による「こ
とばと経験の往復運動的思考」の弱さ、
自前のことばで思考し表現し交流する機
会の乏しさ、パソコン・計算機の多用に
よる技能の退化、などはどう関係してい
るのだろうか。「弱くなっている」のは、
「ことばの力」だけでなく「思考する力」
や、さらに言葉や思考を支える基盤の「体
験・行動、体を動かしていく力」につい
ても同様である。

言語能力育成を孤立的に云々するので
はなく、子どもらの個としての全体的な
迫力の衰退の問題として考えていきたい
のである。

「しみず たけしろう」滋賀大学教
育学部教授。鳥根県松江市生まれ。
日本教育方法学会理事。『合科・総
合学習と生活科―五感を通じた認識
の成立を―』（黎明書房）ほか。

キーワードで読む国語教育

* 発展的な学習

* 子ども読書の日

* ヒドウン・

カリキュラム

発展的な学習

理解の進んでいる子への指導の工夫

発展的学習に強い関心が向けられるようになったのは、平成十四年、文部科学省「確かな学力の向上のための二〇〇二アピール」が出されてからであろう。

アピールでは、基礎基本や自ら学び考える力を身につけること、学ぶことの楽しさの体験等と並んで、発展的な学習で個性等に応じる力をより伸ばすことの必要であることが述べられた。

確かに、これまでの授業において、学習が遅れがちな子どもに対する指導の工夫に比べ、理解の進んでいる子どもに対する効果的な学習指導に関しては、今後の国語科の指導における重要な課題になっていた。

日本国語教育学会編集の『月刊国語教育研究 第三六一号』は「総合的・関連的な指導の具体化」を特集しているが、この中にある次のような実践はこれからの指導開発に一つの示唆を与えている。

【事例一 小学校二年】

・展開や順序に気をつけて恐竜の話を創

作する。

・創作した話を友達によくわかるように話し、友達の話聞く。

・展開や順序を考えながら物語を読む。

【事例二 中学校一〜三年】

・新聞の投稿欄記事を学習材とする。

・独話、対話、話し合い、作文などの言語活動を位置づける。

・総合的な活動を通して、生き方の追求という課題解決を図る。

・こういった先導的な実践を手がかりとし、新しい多様な指導を開発することがこれからの課題となっている。

子ども読書の日

求められる読書指導の工夫

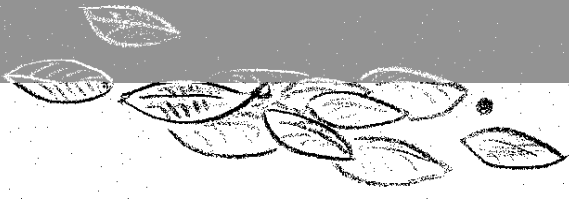
「子ども読書の日」は何月何日か。この質問は意外に難問のようである。

「子どもの読書活動についての関心と理解を深めるとともに、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高めるため」四月二十三日を読書の日としているのは、「子どもの読書活動の推進に関する法律」（平成十三年法律第一五四号）である。

平成十三年十二月に、文部科学省事務

尾木和英

東京女子体育大学



次官から各都道府県教育委員会あてに通知された、「子どもの読書活動の推進に関する法律の施行について」では、子どもの読書活動の推進に関する施策を総合的かつ計画的に推進するとした上で、読書活動推進計画の基本的な内容について明示している。

これを受け平成十四年八月に閣議決定された基本的計画では、学校等における推進に關し次のように述べている。

・従来から国語などの各教科等における学習活動を通じて、読書活動が行われており、子どもの読書習慣を形成していく上で大きな役割を担っている。

・小・中・高等学校の各学校段階で、児童生徒の読書に親しむ態度を育成し、読書習慣を身につけさせることが大切である。

子どもの読書離れの克服については、多くの関係者が強い問題意識を抱いている。各地で創意を生かしたさまざまな実践が展開されているが、今後はここに示されている趣旨を踏まえ、

- ① 読書の面白さを実感させる
- ② 読書習慣を育てる
- ③ 習慣的な読書の基礎となる文章読解の力を身につけさせる

ことをねらいとして、読むことを楽しいと感じる指導の展開が期待されている。

ヒ ドウン・カリキュラム

魅力的な授業づくりの条件

読むことの指導に限らない。子どもが主体的な意欲を感じる授業の設計、学習環境の整備を図る際に、視野に入れることが求められるのが、教室の日常生活に潜在する隠れたカリキュラムである。

この語の定義は一様でないが、一般的には子どもが学級の生活や学習活動に適応する過程で結果的に身につけていく価値、態度、規範意識などに関する潜在的な機能ととらえられている。

これからの魅力的な授業づくりにおいては、教師の意図する目標、内容、学習活動等からなる顕在的カリキュラムと同時に、ヒドウン・カリキュラムとして機能する、学習集団を支配しているきまりや学習集団としての学級文化などにも目を向けることが求められている。

〔おぎ かずあき〕東京女子体育大学教授。
各地の、創意を生かした先導的な実践事例の
収集と分析を続けている。

いま、 小学校では

IT時代だからこそ

塚田 正宏

東京都板橋区立板橋第一小学校

「学校教育のIT化」 研究発表会

平成十五年一月二十四日、現任校において「学校教育のIT化」のテーマによる研究奨励校の発表会を開催した。板橋区教育委員会指定の発表会であったが、案内をホームページに載せたこともあって、北は北海道から南は沖縄まで、多くの方においでいただいた。

この発表会にはいくつか特徴がある。その一つめは、日常の研究の姿をありのまま示そうとしたことである。ともすると、著名な講師を招いたり大がかりな会場の準備に追われたりする発表会になり、それだけで先生方は消極的になる。私は、そんな研究発表会のもち方はもう

避けたいと考えていた。それよりも普段の様子をしっかりと見ていただくことが大事だと考え、朝の登校時から下校時まで、公開する方法にした。また、担任や専科の授業だけでなく、事務室、保健室や給食室（栄養士）もいかにITとかわり、効果的活用を図っているかを見ていただくようにした。

その二つめは、研究のターゲットを教職員の力量アップに定めて取り組んだことである。子どもたちは、休み時間も開放されたパソコン室で、のびのびと機器を操作して楽しんでいる。大人である教職員が、IT対応力を高めることによって、いつそう子どもたちの力を伸ばすことが可能になる。そのために、実技の研修を主として研究を進め、地道な積み上げを重ねてきた。



その三つめは、研究資料にかかる経費を極力少なくしたことである。発表会では研究資料が分厚い冊子になりがちである。しかし、本校の場合、学校のホームページに研究にかかわる内容を多く載せているので、そのうちの要点のみをプリントアウトしたものを配布資料とした。発表会当日、早朝から多くの参加者に恵まれ、発表会の趣旨が生きたとうれしく思った。

時間	年/組	教科	教室	内容
1時限	1/1	算数	PC室	一太郎スマイルでいろいろな制作
	4/1	音楽	音楽室	ビデオカメラで撮った画像を音階づくり
	5/1	算数	教室	インターネットで自分が使う統計データを探す
	6/2	国語	国語室	PCで書いたアニメーションづくり
	教員教員		保健室	ホームページで発信したいことと発表

振り返ってみると

私は、三十六年前に教職についた。その当時を思い返すと、学校における教育機器の変化のすごさを思う。鉄筆でガリ版を懸命に書いた時代がほろ苦くなつかしい。国語専攻の意識もあって、ワープロが普及し始めたときも、「手書きを大事にしなければいけないのではないか」とは言っていたものの、気がつくとも学校と自宅にワープロを一台ずつおいて活用するようになっていた。しかし、現任校に着任すると、すでに主流はパソコンである。電気店に行っても、ワープロの姿は消えつつあった。あわてて自宅にパソコンを求め置き、少しずつ馴染もうと努力し始めている。

今や、道具としてのパソコンそしてインターネットは必要不可欠なものと考えている。学校教育のIT化はもはやとどめることのできない流れとなっている。

だが、しかし 考えさせられる

今回の発表会で、今やパソコン時代で

あることを痛感した。同時に、しっかりと心にとめておくこともあるのではないかと思う。

これからの高度かつ高速の情報化が行する時代にあつて、その光の部分だけに心を奪われると、思わぬ落とし穴が待っているように思う。当然のことだが、パソコンは万能ではない。不確かな情報の洪水の中でおぼれ、疑似体験の中に自己を見失ってしまうこともある。

「伝え合う」というキーワードが国語の指導の核となり、各学校ではそのために腐心している。このことの基本は、人が直接面と向かつて、自分を知らせ相手を知ることであろう。ディスプレイに向かって互いを「伝え合う」ことは、次善の策でしかない、と思う。相手の身振りやかすかな表情の変化を受け止め、その思いや考えを的確に理解することが、何より今求められている。

現任校では、IT教育に力を入れているが、一方で「生身の人と人のかかわり」体験を、例えば、あいさつによるコミュニケーション、異年齢集団を育てることなどもとおして深めさせていきたいと考えている。

「ことば」に感謝する

人間は、「好奇心」によって他の動物とは異なる進化発展を遂げ、今日にいたっている。その一方できわめて高度繊細な言語を作り、駆使してきた。互いをよく理解し、協力・連携してこられたのも微妙なレベルまでわかり合える言語を使いこなしてきたおかげだとつくづく思う。

今、若者の活字離れが問題となり、日本語の理解が不十分だとの指摘もある。

人間の好奇心の成果として生み出されたパソコンが、人間の相互理解と相互伝達の基本である「面と面と向かい合って生きたことばで話し合う」機能を損ねずに前進するよう、努力していく必要があると強く思っている。

私は、余暇にパズルづくりを楽しんでいる。これも好奇心の一端として、子どもの教育に生かせたらと願っている。

〔つかた まさひろ〕東京都板橋区立板橋第一小学校校長。都内小学校、東京学芸大学付属小学校等に勤務。東京都小学校国語教育研究会事務局長。平成十二年度より現任校に勤務。東京都生まれ。



活動をとおして学ぶ 新たな国語の授業の可能性

—イギリスの取り組みを手がかりに

中村 敦雄

群馬大学助教授

1 教科書の変化・教師の不安

現行学習指導要領が「伝え合う力」育成を重視したことにより、昨年度から使用されている新教科書の学習材には変化があらわれた。話すこと・聞くこと、書くことの学習材が、以前の簡略なものから、具体的過程を提示した実際のものに補強された。読解中心の国語の授業の偏りをただすうえで、活動をとおして学ぶ授業への変化に意義を認める方は少なくないだろう。しかし同時に、実際に教える立場として、新たな授業に挑戦することへのとまどいと、ことばの力がほんとうにつくのかという不安をお感じかもしれない。

わたしたち国語教師は話すこと・聞くこと、(生活文・行事作文以外の) 書くことの授業を受けた経験が皆無に近い。読むことについても、パターン化された読解以外の可能性をあまり知らない。それだけに経験知の蓄積が乏しい状態で授業に挑戦することになる。新たな授業の効果について、不安を打ち消せるだけの確証を体得するには時間が必要である。

このようなとき、わたしたちの参考になるのは諸外国での取り組みである。この小論では、いまのわが国にとっての新たなタイプの

学習活動を積極的に実施しているイギリスの実際をみていく。

最近、イギリスの実際を知らせる良書が刊行された。山本麻子氏の『ことばを鍛えるイギリスの学校』(岩波書店)である。氏は日本の大学を卒業し、のち、

生活の拠点をイギリスに移した。現地の学校で三人のご息が受けた教育についてその実際を活写している。氏は言語発達の研究者(レディング大学)であり、客観的な立場からの論述が行われている。書店にあふれる素朴なイギリス賛美本とは一線を画している。

同書にもとづきつつ、わたしたち国語教師にとって必要な情報を補いながら述べていきたい。



2 ナショナルカリキュラムの構造

わが国の学習指導要領にあたる存在として、イギリスにはナショナルカリキュラムがある。ちなみに同カリキュラムはインターネットで閲覧可能である (<http://www.nc.uk.net/>)。5歳から16歳のあいだを四つの段階に分け、キーステージ(KS) 1(5~7歳)、2(7~11歳)、3(11~14歳)、4(14~16歳)から構成されている。各キーステージの最後にあたる7・

11・14歳ではナショナルテストを受け、16歳では中等教育修了一般資格であるGCSEのための試験を受ける。到達度の点検が徹底している。

領域としては、話すこと・聴くこと(Speaking and listening)、読むこと(Reading)、書くこと(Writing)から構成されている。わが国と同じであり、もしかしたら現行の学習指導要

領は影響を受けたのかもしれない。各領域は「学習のプログラム」(Programmes of study)と「到達目標 (Attainment targets)」から成る。

学習指導要領の記述に相当するのが「学習のプログラム」であり、キーステージごと (3

と4は共通内容) に記述がある。一方、「到達目標」として九つのレベルが用意されており、キーステージごとにどこまで到達すべきかがレベルに即して明記されている。

3 話すこと・聴くこと

「学習のプログラム」について、中等教育段階のキーステージ3・4を中心に紹介を進めた。話すこと・聴くことについての「知識・スキル・理解 (Knowledge, skills and understanding)」としては、話すこと、聴くこと、グループディスカッション・相互交流 (Group discussion and interaction)、劇 (Drama)、標準英語 (Standard English)、言語の諸相 (Language variation) がある。最後の二つはわが国の言語事項に相当する。カリキュラムの各所で標準英語の重要性が強調されている点に特徴が指摘できる。

話すことでは、明瞭に流暢に話すこと、写真などの補助資料を活用して効果的に伝えることが重視されている。同書第4章ではイギリスにおける一般的な実践として「トーク」の授業が紹介されている。各自が3分間の発表に取り組む授業である。自分で話題を選択し、調査し、原稿を書く。パネルボードなど

の補助資料を用意する。こうした準備のうえで、書いたものを見ないで発表し、質疑応答を行う。氏が紹介している私立学校の事例では、トークが試験として行われ、学習者だけでなく、校長、他の教師も聴衆として参加するという。準備にあたって親が手伝う場面も少なくないという実際も披露されている。

話すことと表裏一体の関係で、受け身ではなく主体的に聞く (= 聴く) ことが重視されている。キーステージ3・4では「話の曖昧性とか、故意に不明瞭にした言い方、証拠の不当な使用法、根拠に根ざさない議論などについても、それに気づくように指導を受ける」といった、クリティカル (批判的) に聴くことが項目に含まれている。グループディスカッション・相互交流については、低学年から重視されている。相互交流は直接対面だけでなく、インターネットなど電子媒体によるものも含まれる。

4 劇 (ドラマ) の意義

ところで、話すこと・聴くことのなかの劇 (ドラマ) について、教育としての意義があるのかと疑問をもつ方もいるだろう。わが国で劇というと学芸会などの行事で扱われているにすぎない。ここでの劇とはステージ上の特別な活動ばかりではない。身体活動を含めた自己表現や、脚本の劇化をとおした作品理解、批評力の育成が目ざされている。

わたしたち国語教師は文字言語に過度の注意を向ける一方で、音声言語や、ことばを発している身体への関心が低かった。また、文

学作品の理解というと、作品を細かく切り刻み別のことばで置きかえていくことに陥りやすい。わが国の現状をみると、音声言語教育としての朗読や動作化による作品の表現の試みが行われている段階にある。だが、ナショナルカリキュラムではそれが総体的・系統的に位置づけられている。そのうえ、統合的な観点から、読むことの対象としてイギリスが誇る著名劇作家の脚本が列挙され、書くことでも脚本が挙がっている。同書第7章では、劇の授業の様子が披露されている。

5 読むことの対象としてのメディア

読むことについての「知識・スキル・理解」としては、テキストを理解する (Understanding

texts)、古典 (English literary heritage)、異文化テキスト (Texts from different cultures

and traditions)、印刷・電子媒体による情報テキスト (Printed and ICTbased information texts)、メディア・動画テキスト (Media and moving image texts)、ことばの組み立てと種類 (Language structure and variation) がある。最後の一つにはそのなかに文法も含まれており、言語事項にあたるものと理解できる。

自国の古典と異文化テキストの双方を尊重している点、ならびに印刷・電子媒体による情報テキスト、メディア・動画テキストまで

が包含されている点に大きな特徴がある。同書第5章では、小説の場合、抜粋ではなく1冊の本を読むことまで含まれること、シェイクスピアの脚本について、『ロミオとジュリエット』の映画・舞台を鑑賞し、脚本とそれらとを比較する学習が紹介されている。日常的な言語生活を視野に入れ、個人の言語的な成長が想定されている。多文化社会の実情も考慮されているところに注目したい。

6 書くこと

書くことについての「知識・スキル・理解」としては、コンポジション (Composition)、プラン・草稿 (Planning and drafting) が挙げられている。前者は書く活動全般を指し、後者は推敲や修正を指す。他に、わが国の言語事項にあたる、句読法 (Punctuation)、綴り (Spelling)、ハンドライティング・プレゼンテーション (Handwriting and presentation)、

標準英語、ことばの組み立てが挙げられている。同書第6章では、本作り、詩集作りといった、効果的なハンドライティングや、イラストなどの視覚効果も含めた書くことの学習活動の例が紹介されている。また、「マクベス」を新聞記事にするとという書き換えの表現学習、脚本や物語を書くといった創造的表現活動の例も取り上げられている。

7 活動をとおして学ぶ授業は学力低下をもたらすか

学習者が活動を楽しみながら進める学習について、「遊んでいるだけで力がかからない」といった非難がなされる。しかし、イギリスでの実際からすると、経験知の蓄積にもとづき、相応の成果をあげていることがうかがえる。ナショナルカリキュラムが制定されたのは意外にも1980年代末である。以前は教師の裁量に任されていた歴史的経緯、いまでも検定教科書がなく教師が学習材を活用できる自由が独自の特徴をつくったのだろう。

ただし、イギリスの母国語教育は順風のなかにあるのではない。伝統的階級差に加え、移民増加により国内では他文化・多言語状況が生じている。イギリスの学校ではあえて区別をせず、一般の子どもと一緒に学ぶため、教室内の英語習熟度のばらつきが生じているようだ。こうした状況に鑑み、全国レベルでの読み書き能力の底上げを旨とした「全国読み書き戦略」も行われ、すべての公立初等学校で毎日一時間のリテラシーアワーが特設

された。佐貫浩氏はバーミンガム市の学校での取り組みとして「全員で読み、書き取りをし、ストーリーを作り、そして全体で話し合う」*活動を紹介している。ドリルの学習に陥らず、活動から学ぶ取り組みが行われている点に蓄積の厚さがうかがわれる。

2000年に公表された「生徒の学習到達度調査 (PISA)」によると、15歳児の読解力について日本とイギリスとはほぼ同ランクであり、統計的有意差はないとされる**。イギリスの母国語教育を特徴づける、活動をとおしたことばの学びが、わが国で懸念される学力低下に直結しないことを裏づける結果として解せよう。

本書では競争原理導入による学校間格差、イギリスの教師の置かれた立場についても述べられており、多面的に考えるうえでも参考になる。山本氏の著書をお読みになって、わが国のこれからの教育について確かな手がかりを得ることを読者諸賢におすすしめしたい。

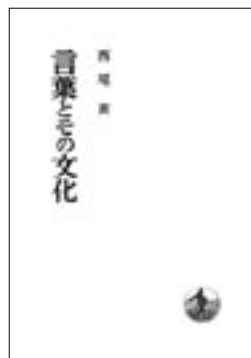
〔注〕 * 佐貫浩『イギリスの教育改革と日本』高文研、2002年。

** 『図表で見る教育 OECD インディケータ』明石書店、2003年。

『言葉とその文化』を読む

三浦和尙

愛媛大学



西尾実『言葉とその文化』
(岩波書店、1947年)

もう三十年も前の話になるが、大学時代、野地潤家先生のご講義で「西尾実」という名前を頻繁にお聞きしたような気がしている。もしかしたら、そんなにつもそのお名前が出たわけではないのかもしれないが、野地先生がお名前を口にされると、昂然と言うか、うつとりと言うか、いずれにしても一種独特な雰囲気を感じさせておられたように記憶しているのである。

それは「西尾実」という名前に確信をもった雰囲気であり、野地先生が確かに「西尾実」に尊敬の念を抱いていらつしやるということが伝わる雰囲気であった。

国語教育の『名著』再読

私などは単純であるから、西尾実先生のご著書をまともに読んだわけでもないのに、西尾実という先生は偉い先生だと思いついてしまった。無論、後にいくらか西尾先生のご著書に触れて、その思い込みが間違いではないことを知ることになったのは言うまでもない。

さて、「名著再読」という形で西尾実を取り上げる場合、『国語教育学の構想』(一九五二)、『国語教育学序説』(一九五七)、『言語生活の探求』(一九六一)など、どの著書を取り上げても「名著」に値するものだと思うし、取り上げ方としては、時枝誠記との「言語教育か文学教育か」といった論争を対象化するのも興味

深い。

しかし今回私はあえて『言葉とその文化』を取り上げた。それはひとつには、本著が(戦後の国語教育界に)日常的なことばの実態把握を根底とする言語文化革新の方向を照らす道標(野地潤家『言葉とその文化』解説、『西尾実国語教育全集』第四巻)となったと評価されている書物であるからである。また私自身、現今の(あえて言えば)「音声言語ブーム」に、一種の危うさを感じており、「道標」としての本著に、立ち返るに十分な理由があると考えるからである。

例えば、本著には次のように記されている。

「こういう文字を使っているために、われわれの言葉が、話す言葉と書く言葉といちじるしくかけ離れ、われわれの言葉の文化が、文芸も、哲学、科学も、すべて、読む文化としてのみ発達を遂げ、聞く文化としてはほとんど発育不能の状態にある。しかも、そのために、読む文化さえ、大衆から遠ざかり、日常の話言葉から離れて、無力不健全なものになっている。」

「これまでの学校教育では、その教育のほとんど全部が教科書という読み書く言葉に向けられていた。近年、映画・音盤・ラジオ等が多少取り入れられ始めてはいるけれども、それは補助的手段にすぎない。本体は依然として教科書であり、文字言葉である。」

「近年、国民学校では、国語の一分科として話方が設置され、演説や童話の稽古ではない、日常の話し言葉の教育がとりあげられている。ついで、中等学校でも、(中略)実施されることになってきた。(中略)しかし、それは制度としての規定であって、教育の実際としてはどれだけの実績をあげ得ているか。わたくしには、このままでいけば、この進歩的な制度さえやがて取消されるときが来はしないかとさえ懸念せられる。」

こういった内容を、今「半世紀以上も前の話」だと、切って捨てることができらるだろうか。むしろ今日のことを言われているのだと錯覚するようなところはなにか。

逆に「いや、音声言語の学習指導は、

今日むしろ盛んになりすぎている」という人もあるだろう。私もその考えを一概に否定するつもりはない。しかしその「盛ん」が、ほんとうに実を挙げているのか、ほんとうに子どもに力をつけているのかということになれば、私自身は、私の力不足をすべて認めたいうえで、疑いなしとはしない。

西尾実はこのようにも言っている。

「わたくしは、日常の話し聞く生活において、言うべきことは、言うべきときに、言うべき場所で、言うべき方法で言わなくてはならぬことを主張し、そこには言葉に関する新しい倫理が生れなくてはならぬとさえ考えてきた。しかし、それにもまして必要なのは、聞くことの真意義に目ざめることである。」

私たちは果たして「言うべきときに、言うべきことを……」という子どもを育て得ているだろうか。「新しい倫理」が何かについては、ことばを慎重にせざるを得ないが、西尾実においては、「民主主義的革新」が視野に入れられていたことは確かである。そういう意味でも、ま

た「聞くことの真意義」でも、今日を振り返る重要な視点となろう。

『言葉とその文化』は、「話し聞く」領域を言葉の地盤領域と位置づけ、その豊かさの保障によって「読む書く」領域を充実させ、さらにはことばの文化を発展させようという考えに貫かれていたものである。そのように見たとき、現今の話しことばの学習指導が「の仕方」的なところにとどまっていないうか、私たちは確認する必要があるように思われる。

私の手元にある『言葉とその文化』は、時代が時代だけに、付箋を貼ることさえ、いや、めぐることもさえはばかられるような紙質の、わずか一〇三ページの本である。しかしそこにある内容は、話しことばの教育の根幹を確認させてくれるものであり、今の混迷期にこそ読まれてよいものであると思われる。

〔みうら かずなお〕愛媛大学教授。近著に『話す・聞くの実践学』『読む』ことばの再構築(ともに三省堂)。四月から附属小学校校長となり、子どもたちとのふれ合いを楽しんでいる。しかし、発達差のある子どもたちへの話は難しい。

本の紹介

糸井通浩



阪田寛夫
『童謡でてこい』
河出文庫・河出書房新社
1990・11刊

2歳7カ月の知(とも)くんが夜寝るとき、おばあちゃんの歌う童謡「サツちゃん」を聞きながら涙を流したという。驚いたおばあちゃんに孫は言った。「知くんもう泣かないからもっと歌って」と。

今この話を読みながら、客員教授として四か月北京ですごした十五年前のことを思い出した。ある日の夕刻、大きなホテルの喫茶コーナーで一人コーヒーを飲んでいると涙が出てきたのである。スピーカーから流れる日本の歌のせいだとすぐ分かった。「雨の中の二人」のメロディが流れていた。歌の力、ことばの力の不思議を思わざるを得ない。

言語には、アクセントがある。主として音の強弱によるか、高低によるかで二分されるが、前者であればメロディ言語であり、後者であればメロディ言語。日本語は、メロディ言語ということになる。つまり日本語はことばがメロディをもっている、

歌詞に曲をつけるとなると、ことばのメロディと音楽のメロディとをどう合わせるかが問題になる。

童謡・唱歌において、ことばのメロディ(アクセント)に注意して、作曲することを心がけた作曲家たちがいた。今静かに童謡・唱歌が見直されてきているが、単に大人の心の故郷だからというのではなく、現代のリズム重視の歌に対して、メロディが重視されていた時代の歌への郷愁でもあるのではないだろうか。

知くんを泣かせた童謡「サツちゃん」を作詞した人こそ、ここに紹介する『童謡でてこい』の著者である。先の話は「文庫版のあとがき」で著者自身が紹介している。この本で阪田氏は、約50曲を取り上げて、ひとつの童謡ができるまでの作詞家や作曲家にまつわる事情を語っている。心癒される話、歌ができるまでの苦労話や楽しい裏話であったり、わらべうたなどの伝統的な音階の話で

あったり、話題が豊富であるが、著者の阪田氏ならではの話が多い。

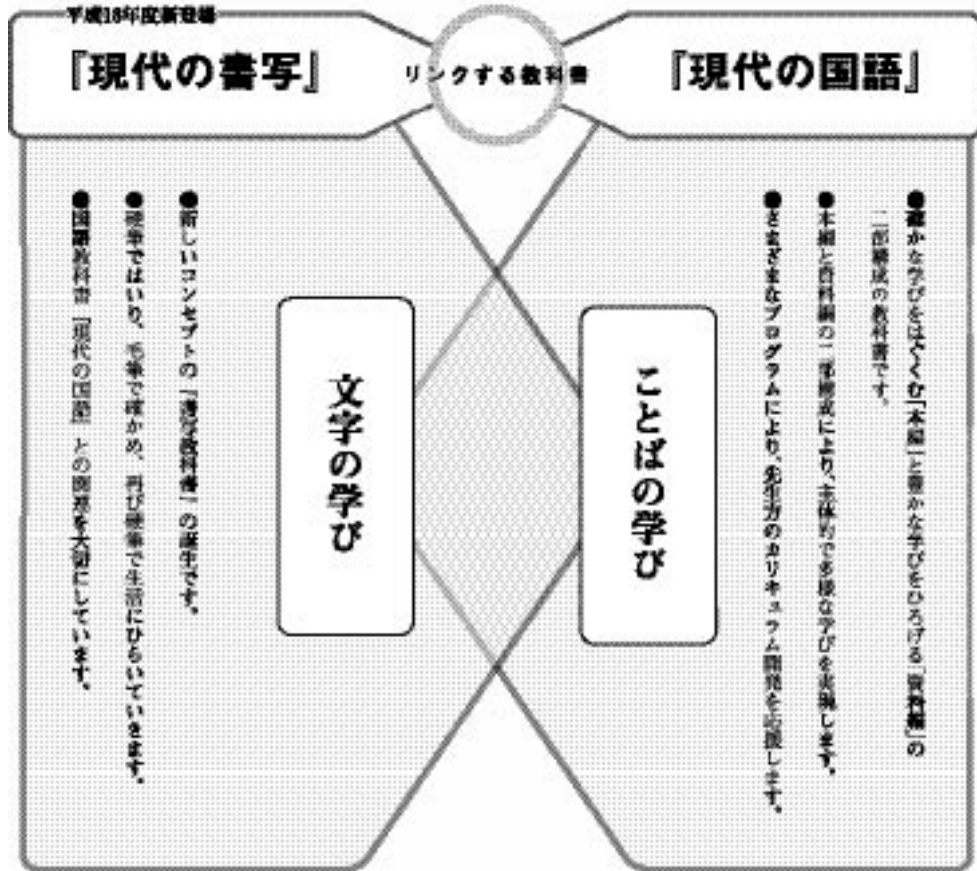
そうした中でなんといいっても、まど・みちを作曲になる「ぞうさん」についての話をもっとも心に残る話である。この歌については、二回にわたって書かれ、いわゆるこの本の「あとがき」も、「ぞうさん」とまどさんのことで埋められている。

まどさんが、あの歌は象の子が「象が象として生かされていることがすばらしい」と思っている歌だと述べ、「よく、目の色や髪の色が違ってても仲よくしよう、といわれたりしますが、私はそうではなくて、違うから仲よくしようと思うわけです」と語ったことを著者は紹介してくれている。このことが書いてあるだけでも、私にとってこの本は大事な本なのである。

〔いとい みちひろ〕龍谷大学教授。文法・文章・談話を研究。

教科書新時代

編集部では現在、平成18年4月より使用がはじまる国語教科書「現代の国語」と書写教科書「現代の書写」の編集をすすめています。教科書新時代は、そのプロセスを公開し、みなさまと交流を深めます。



対話し、共に創る教科書『現代の国語』・『現代の書写』

現代の国語 第3号

二〇〇三年一月一日発行
定価 一〇〇円(本体九六円)

編集・発行人 佐伯 勇

〔発行所〕 株式会社 三省堂
〒一〇一八三七
東京都千代田区三崎町二一三二一四
TEL 〇三(三三三〇)九四一七〔編集〕
振替 東京 〇〇一六〇一五五四三〇〇

〔印刷所〕 泰成印刷株式会社
東京都墨田区両国三一一二二

「話す・聞く」活動は、教室(学室)で、生の自分をそして生の他者を受け入れる学びの大事な部分です。本号では、『現代の国語』アンケートの中から、「話す・聞く」に関する項目の一部をご報告しています。アンケートへのご協力に、こころより御礼申し上げますとともに、18年度版の教科書づくりへの協働的参加を改めてお願い申し上げます。(F)



編集後記

神奈川県内のある中学校の一年生全員の「自分新聞」を読みました。一人ひとりが一年前の小学生とは違ってしまった「自分」を発見していました。本号では「からだとは」を特集しています。

中学生は、いやでも変化する「からだ」と本人の意思に関係なく広がっていく「ことば」の両面で、自己の内部と外部に折り合いを付けることに、とまどいを感じたり不安を感じたりしています。中学生は、かなえがたい「調和」をめざしてもがいているということもできるでしょう。

新刊・新刊

篠田信司・

大村市中学校教育研究会国語部会著

中学校国語科の評価

単元の学習指導と評価計画—1,600円

国語科における「指導と評価の一体化」とは。

『現代の国語』 準拠の実践的評価入門書。

高木展郎 著

ことばの学びと評価

2,100円

新学習指導要領をふまえながら、実践的に学習と評価の新しい展望を示した提案の書。

高木展郎・三浦修一 監修

ことばを育てる学びのプラン

2,000円

中学校国語科で生徒の学びをどう組織するか。『現代の国語』による学習プラン実践集。

河野庸介 著

去りゆく時をつかまえて1,200円

日本各地で出会ったなつかしい風景を、うろうろの中で切り取ったエッセイ集。

久芳美恵子 著

教師のための教育相談の基礎

1,800円

毎日の教室で取り組める教育相談の理論と方法を楽しみやすいイラスト付きで明解に示す。



教科書からひろがる学びへ

国語科教育

「話すこと・聞くこと」

の扉をひらく

新しい学びの実践研究

沖山吉和 監修

全日本中学校

国語教育研究協議会 編

952円

「読む」こと

の再構築

三浦和尙 著

1,500円

「読む」こと

の再構築

尾木和英 著

1,800円

提言 国語科授業

改善十二章

尾木和英 著

1,700円

「伝え合う力」

とは何か

花田修一 著

1,700円

「読むこと」

の授業改革

花田修一 著

1,800円

50のアイデア

気軽に楽しく短い時間で

力のつくことばの学習

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

50のアイデア

自主的に学べる50の活

動例と、ことばの楽し

さがわかる50のミニア

イディアを収録。

楽しみながら活用でき

る作文学習のアイディ

アを見開きに収めた使

いやしい実践例集。

音声学習の基本をつか

むユニークな活動例50

と音声指導に役立つ知

識・情報のコラム35を

収録。

使いやすさ、わかりやす

さ、精度で高い評価を

受けている、中学生向け

国語辞典のトップセラ

1。収録語数5万5千。

2色刷。

発売以来圧倒的な支持

を受けている漢和辞典。

親字7000字、熟語

35300語を収録。2

色刷。

用字用語、書き方・話し

方から漢字の読み書き、

古典の知識まで、日常生

活に必要なことばの知識

を網羅した、何でもわか

る「日本語百科」。

「対話する教科書」をめざして 教科書新時代

現在、編集を進めている2006(平成18)年度版『現代の国語』『現代の書写』は、多くの先生方やご関係の方々とインタラクティブに交流しながら作りあげていきたいと考えています。そのために教科書作りのプロセスを公開し、多くの方から直接ご意見を伺えるような掲示板などもご用意しています。



対話する



教科書フォーラム

掲示板形式のフォーラムです。教科書に関わることならどんなことでもお書き込み下さい。よりよい教科書を創るためにみなさんの意見交換の場にしていききたいと思います。

意見を寄せる



新しい教科書のためのアンケート

ホームページ上で新しい教科書についてのアンケートを実施します。

アイデアを提案する



共に創る教科書へ

みなさまから学習材案や実践アイデアをお寄せいただくページです。

<http://tb.sanseido.co.jp/cyukoku/>



『現代の国語』『現代の書写』ホームページ
ことばと学びの宇宙



キーワード検索搭載！

ことばの学びをサポートしてきた「国語の世界」が新しくなりました。キーワード検索システムやより使いやすいナビゲーションを搭載し、新しく、斬新なコンテンツを豊富にご用意しています。

- 『現代の国語』最新情報
- 新しい「ことばの学び」の創出の道しるべとなるコラム
- 多くの訪問者とともに話し合う「フリートーク(掲示板)」など

辞書の世界

三省堂刊の辞書、事典を紹介し、「ことばの学び」との連携を探ります。

広がる学びの世界

総合的な学習の時間を考えます。

メールマガジン

[KOKUGO MAIL-MAGAZINE]

(月1回・無料)

「ことばと学びの宇宙」のトップページからご登録いただけます。

国語の世界

ことばの学びをサポートします

ご意見、ご感想はこちらへ

kokugo@sanseido-publ.co.jp

またはホームページお問い合わせフォームへ